

彫刻家本郷新の「わだつみの声」像通覧

断絶と継承から平和を構築するために

佐藤 広也

(北海道教育大学非常勤講師・札幌市立石山南小学校教諭)

日本を代表する彫刻家本郷新の作品の一つに、「わだつみの声」像がある。この像は、ブロンズ像で、戦没学徒記念像である。戦後間もない時期に出版されベストセラーとなった「きけわだつみのこえ」という戦没学生を中心とした手記や遺書で構成された本の益金で作られたものである。設立予定の東京大学は設置拒否しやがて京都の立命館大学へ建てられた。1969年には大学紛争の中、暴力で壊され、再建された。「わだつみ像」は「還暦」の60年を迎える。全国各地にはいつの間にか「兄弟」が増えている。戦争と平和についての考え方の違いはあっても増えていく彫刻の背景を考え、彫刻に込めた本郷新の願いと増えた像から「わだつみの声」の継承とは何かを考察する。

本論文での課題

彫刻家本郷新の代表作の一つ「わだつみの声」像を軸に戦争と平和を巡る考え方の相違による像の「破壊」と「創造」の歴史を明らかにし、「像」及び関連する作品には本郷と人々のどんな思いが反映し、その「声」をどう「聴き続けて」現代へと引き継ぐのかその意義を明らかにする。

1 大学の「わだつみ像」と「断絶」、そして「継承」の場面について

現在、「わだつみ像」が立つ大学は立命館大学（国際平和ミュージアム）と慶應義塾大学（三田図書館）の私学である。しかし、本来は東京大学と北海道大学の国立大学に置かれる予定であった。

過日の立命館大学における「わだつみ像」の受難は、現代の「断絶」を象徴する一つのショッキングな事件であった。現在の北大における状況もまた断絶の時代の例外ではない。昨年からつづけられてきた北大の「わだつみ像」建設運動は、今や大きな暗礁にのりあげてしまった。この運動の一責任者として、私は数多くの協力者諸氏、そして製作者の本郷新氏に何と弁明してよいのか、途方に暮れるのみである。

（「北海道新聞」1969年8月19日 井上泰男北海道大学文学部助教授「現代における『わだつみ像』より」）

立命館大学と北海道大学には共通の並び立つはずの「わだつみ像」があるはずだった。

「1969年5月20日」の立命館大学の「わだつみ像」の「受難」はもう一つの北大の像の「受難」を引き起こした。立命館大の像の破壊は「断絶」の「象徴」だ、と井上氏は次のように続けた。

「私にとって、この像の建設運動はもともと政治的なイデオロギーとはおよそ無縁な、いわば「心情的」次元から出発している。それは一つの「鎮魂の碑」をたてたいという意味以上のものではない。北大を巣立ち、戦場に消えていった多くの無名の戦没者を慰霊し、戦争に傷ついた一つのかなしみを結晶化することそうすることで、われわれの戦後史の空白を少しでも埋めたいと願ったまでなのである。像の建設が、結果的に反戦平和の意識を高め、広めることに寄与できるなら、それはそれで望ましいことにちがいない。しかし、そのことを目的としてこの運動を組織化し、社会化しようとしたのだと考えるならば、それはまちがっている。だから『わだつみ像は現代における反戦運動の原点にはならない』と、急進的な学生諸君から、批判されても、そうかと思うまで、もともと反戦運動のシンボルにするつもりでこの像をたてたいと思ったわけではないのである。また逆に『戦争体験はあくまで個人のもので、わだつみ像によって継承されるようなものではない』と、戦中派の教官から指摘されても、同じ世代のもつ傷の深さに共感するだけで、意識的に戦争体験を媒介する手段として像の建設を考えたのではないのである。この春まで私は、一緒に運動をすすめてくれたある『サークル』の学生諸君との間に、世代をつらぬ

く『連帯』の感情をもつことができた。今でも、この『断絶』の状況の中でも、なおかつ、『連帯』の道をどこかに求めたい気持ちはある。しかし、だからといって、私は『わだつみの悲劇』としてか戦争に抵抗できなかった世代の歴史的な意味を、そう簡単に否定する気にはなれない。それは、何ものにもよってもいやすことのできない傷口をもった世代として、その存在の理由をもっている。

すでに戦後 20 余年たった今日、『わだつみ像』はもっと静かなものとしてあらねばならない。もはや『反戦運動の原点』とか、『戦争体験の継承』とか、そうした議論の対象として存在する必要は少しもない。それはひっそりとそこに立ち、一つの青春のなげきを永遠に訴えかける。そのようなものとしてあればよいのではなかろうか。そして、そのようなものとして存在することを要求できる権利をもっているのではないだろうか。」

40 年後、断絶と継承の問題は立命館大学から問題提起される。2009 年 5 月 20 日、『北海道新聞』（夕刊）は、文化欄に福間良明立命館大学准教授の『戦争体験と戦後世代間の断絶直視を』の記事が載った。「5 月 20 日」は、「わだつみ像」が破壊された日である。福間氏も新聞社も日付に意味を持たせてこの日に合わせて記事を掲載したわけではないらしい。だが、このタイミングで載った記事は、今日の「わだつみ像」評価を含んでの発信であり、冒頭の井上氏の言葉と同じ言葉を使っていた。

立命館大学国際平和ミュージアムの「像」にはこうした記事を含め「像」の兄弟に触れていない。日本戦没学生記念会機関誌『わだつみのこえ』（発行人は中村克郎）は東大五月祭に置かれた 1951 年 5 月 27 日の「わだつみの声」像を掲載したが後に立命館大学に立った像である。末川博総長は「わだつみ像」と呼んだ。



資料 1

『わだつみのこえ』 No. 7 の東大の『わだつみの像』



資料 2 「戦没学生記念像 わだつみの声」

上は 2009 年、札幌市中央区宮の森本郷新記念札幌彫刻美術館前庭で撮影。この像こそ、井上氏が言う北大での「受難」の像。「北大」に置かれるべきであった「幻」の「わだつみの声」像。だがいずれも立命館大学国際平和ミュージアムの現在の像ではない。立命館大の「わだつみ像」しか知らない者にとってはある種の驚きだろう。

台座にある文字は、『戦没学生記念像 わだつみの声』。作者本郷自身の文字が石に刻まれている。これが本郷の彫った文字であればそもそものこの像の「本名」であるといっていよいかもしれない。

冬の札幌の『わだつみの声』像は雪に埋もれる。札幌の雪もまた一頃に比べれば優しくなった。高度経済成長期、札幌の雪も酸性雪であった。したたり落ちる雨よりもべとと像についたままの霧や雪は、ブロンズ像には優しくない。それでも立つ。

『わだつみの声』像の足下部分には「1950.8.15 Shin Hongo」の文字が刻まれている。全ての『わだつみ像』にはこの年月が刻印されている。石膏原型がこのように刻まれているためである。この像の原型に刻まれた文字はこれだけであり、どこにも像の「本名」などはない。

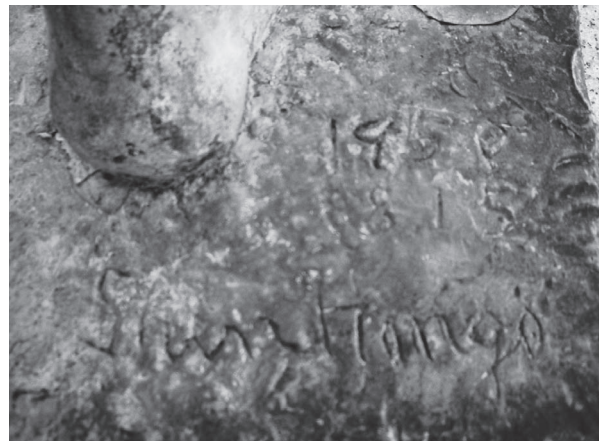
本郷新記念札幌彫刻美術館前庭の像の足下。「1950.8.15」は作品の後ろ側、斜め左上からでないと見えないことになる。立命館大学平和ミュージアムのものはどうだろう。「1950.8.15」を像の「完成」日と言う指摘が結構見受けられる（『立命館百年史』第2巻p953など）が、何を根拠として「完成」としているのかはわからない。「完成した日」を示すのか、あるいは何か願っての刻みなのかもそこからはわからない。多くの日本人、そしてアジアを中心に「大東亜戦争」の戦場となった人々にとっては、終戦記念日であり、韓国では「광복절（光復節／クァンボッチョル）」、北朝鮮では「해방기념일（解放記念日／ヘバンキニョミル）」である。

「1950」年は、「朝鮮戦争」が始まり、占領下日本では再軍備も取りざたされる状況下であった。



資料3 冬の『わだつみの声』像

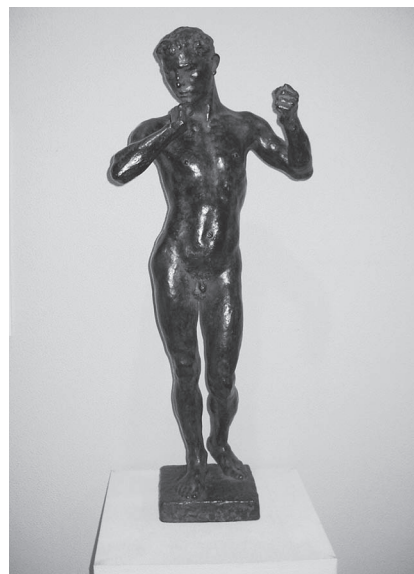
そして、実は3体目の像が存在している。しかし、初代の東大＝立命大の『わだつみ像』から数えれば4人目となる。札幌市豊平区、私立北海高校に立つ像。この像もまた同じ「1950.8.15」の刻みがある。台座に『わだつみ像』、『本郷新』と正面にある。後ろにも『わだつみ像』とある。『わだつみ像』は破壊されたが、再び造られ、その＜兄弟たち＞が生まれた。破壊を断絶というなら創造を継承と呼びたい。



資料4 1950.8.15 と台座に刻まれた写真



資料5 北海高校生徒玄関横『わだつみ像』



資料6 『わだつみの声』エスキース
本郷新記念札幌彫刻美術館蔵 高さ70センチ、ブロンズ像



資料7 エスキース 足下部分

本郷は、「マケット」（模型）という用語は使わずエスキース（習作）と呼ぶ。いずれもフランス語。「わだつみの声」像のエスキースや原型は、サイズが2メートル近くのもの、74センチのもの、35センチほどのサイズ違いのものが少なくとも3種類はある。

本郷新記念札幌彫刻美術館には、本郷の石膏原型や作品が収蔵されている。

エスキースの台座には「1950.6」の刻みが見える。その6月は朝鮮戦争の始まった月であった。

『わだつみのこえ』像が、「兵士のメタファーとみることができる。」（三上満良『近代の彫刻』 p 197 淡交



資料8 『わだつみの声』石膏原型

社）かどうかは検討の余地がある。確かに「戦没学生記念像 わだつみの声」であり青年をかたどっている。しかし、裸である。本郷は裸であるこの青年像に兵士のメタファーだけを求めたのではない。

石膏原型が本郷新記念札幌彫刻美術館にある。先のエスキースも石膏原型も常設展示ではない。また石膏原型は彫刻の型どりと鑄造のためにこうしていくつかの部分に分けて鑄造される。破壊されているわけではない。立命館大学国際平和ミュージアムに立つ『わだつみ像』は、立命館大学にとっては実は「二代目」。「初代」はそれではどこにあるのか。一般公開されておらず普段は見ることは出来ない。「初代」の「長男」像は、やはり立命館大学の保管庫に今も自立している。破壊されてから、毎年の「不戦の集い」には外に建てられて集会を催していたという。新しい像が建てられ国際平和ミュージアムに収まった年までは、「長男」はまさに「モニュマン」として活躍していたことになる。だが、現在は、その存在は封印されている。

2 わだつみ像「長男」の顔が語る戦後 酸性雨の中で立ち続けたわだつみ像

「長男」は京都広小路の立命館大学に建てられ破壊されるまでの16年の間に資料9の写真のような白く見える



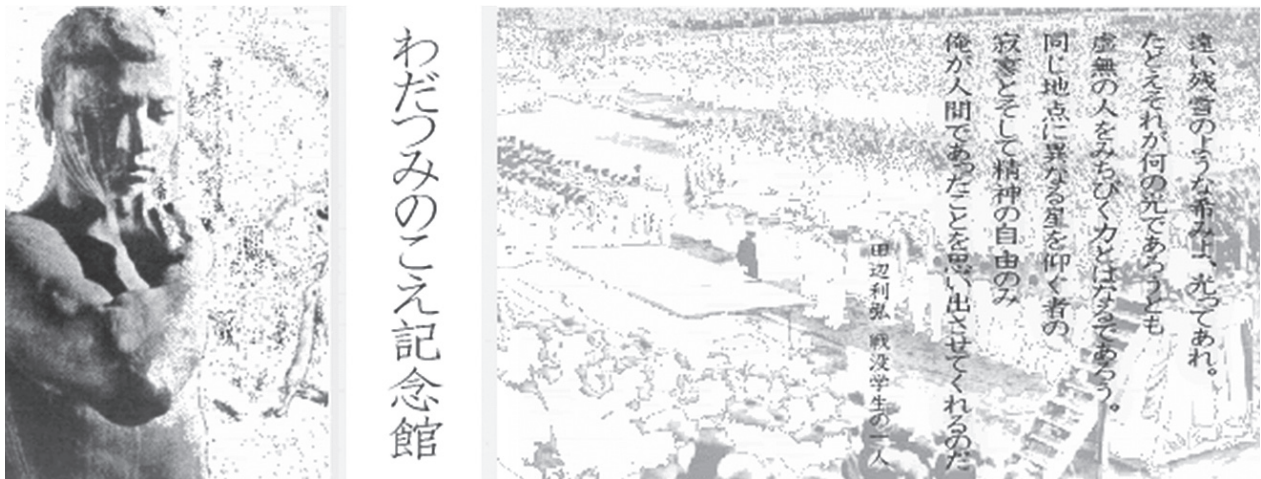
資料9 『わだつみ像』

立命館大学広小路 本郷新記念札幌彫刻美術館展示パネルより。

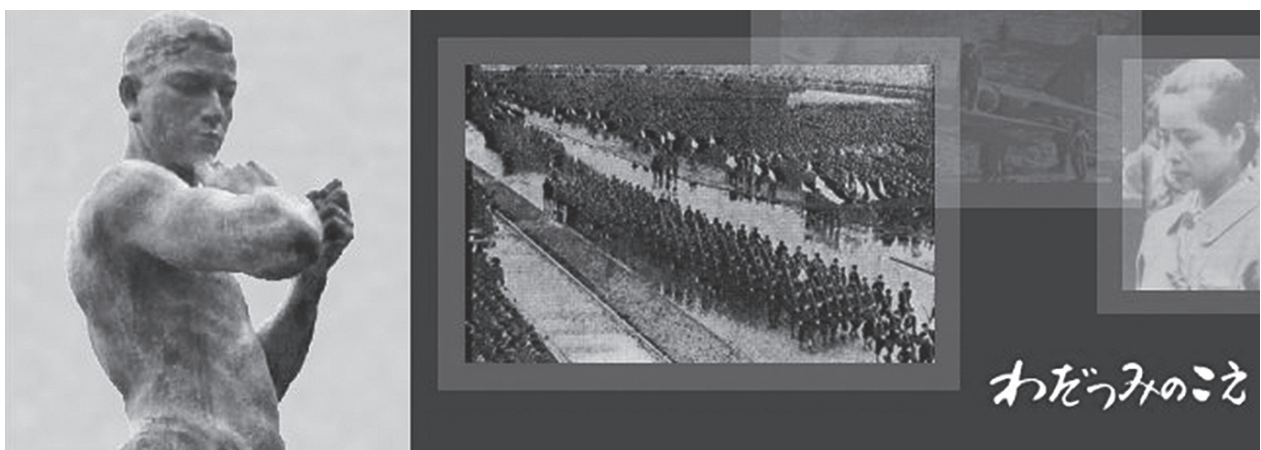
ラインが入っている。これはおそらく、アシッドライン acid line であり、酸性雨 acid rain の影響を受けた物と思われる。これが16年たったアシッドラインかどうかはわからない。建立から10年以内の長男の写真だと思われる1959年頃の写真でもこのラインは確認できる。京都御所のそばにあったにもかかわらず、この像は「溶けている」。それは高度経済成長期の阪神工業地帯の強烈な公害の歴史を物語る。その時期の、京都のブロンズ彫刻と酸性雨についての研究は未見である。現在の立命館大学の『わだつみ像』は屋根のある場所にありこのような運命はたどることはない。いつもきれいな顔のままの『わだつみ像』がそこに立つのである。

▼資料10 わだつみ記念館ホームページより
<http://www.wadatsuminokoe.org/>

わだつみのこえ記念館
東京都文京区本郷5丁目東大赤門前
この記念館にはまだ『わだつみ像』はない。



わだつみ記念館のホームページの像の顔を見ると向かって左には、大きな白いアシッドラインが無残に見て取れる。また顔の右側の背景は、ガラス窓のようで、立命館大学の初代、長男の顔である。私の手元には「日本戦没学生記念会再発足宣言」がついた「しおり」があるのだが再発足宣言は1959年である。しおりがその時期のものであれば、その顔と同じ写真である。そうすると酸性雨の影響は10年を経ずして現れたことになる。



資料11 わだつみ会ホームページより

同じホームページの像。撮影アングルが全く違う。顔はそんなに汚れていないように見える。資料10の「像」の写真を撮るのは、台座がかなり低い時があるいは脚立を立てて撮影しなければ無理。通常は資料11のように撮影することは、背景の青空が見えるのと彫刻の色の違いがあるから現在の国際平和ミュージアムの像では不可能。もちろん「初代」の顔ではない。背景が処理されていないとしたらどの『わだつみ像』なのかはわからない。

石弘之は『酸性雨』（岩波新書）で、北海道庁の旧北海道庁赤レンガ前の池のそばにある本郷の『北の母子像』（1985年）が、酸性雨の影響を受けていることを指摘している。その酸性雨や酸性降下物のその時期の原因の特定はこの本では解説がない。同じ型からできた母子像のブロンズ像は世田谷区役所にあるが、現場で確認したがこちらはアシッドラインを見ず大変美しい。

道庁前の『北の母子像』の真上にはイチョウの木の枝が伸びている。この枝は、雨から母子像を守ってはいない。その逆に、枝先に集まる水滴は時に濁流のようになって彫刻へ滝のように襲いかかっていく。世田谷区役所の「像」の上には何も無い。

「長男」のあった広小路校舎の像の真上はどうなっているのか。別のいくつかの写真で確かめたが、上には木の枝も建物もない。つまり上空から雨が集中的に落ちる設計とはなっていない。にもかかわらずこのアシッドラインの状況である。像は様々なことを語る。時を語る。「物、語る」のである。

3 彫刻家本郷新の『わだつみ像』



資料12 本郷新
本郷新記念札幌彫刻美術館
パンフレットより

舎には『嵐の中の母子像』があり、国際平和ミュージアムには、「なげけるか いかれるか・・・」の短歌が刻まれた「ペンダント」が収蔵されている。

彫刻家の名前を本郷新（ほんごう・しん）といい、1905年12月9日に札幌で生まれ、1980年2月13日に東京で死去した。日本を代表するモニュマン作家である。立命館大学にはこの作家の作品は、国際平和ミュージアムに『無辜の民』、琵琶湖くさつ校



資料13 国際平和ミュージアムの『わだつみ像』

初代、つまり「長男」は、『わだつみ像』『わだつみの像』『わだつみのこえ』『わだつみの声』と呼ばれる。なぜか『日本彫刻の近代』展図録（淡交社）では、『わだつみのこえ』と平和ミュージアムのものを紹介している。残された当時の資料にもこれらの名前が混在しているし、「像」の解説には「の」の文字はない。いずれにせよ、これを「本名」というかどうかは異論がある。ミュージアムの台座は、先の写真で分かるように最初の台座ではない。黒い円柱部分の台座とさらにその下の地下から伸びる白い円柱が台座であり、そばに寄ることはできない。当然、後ろの右斜めの「1950.8.15」は見えない。最初の台座の石の行方はわからない。

海をバックに立つ『わだつみ像』の写真や表紙の本がいくつもあるがそれらはみな合成である。海を見下ろして立つ『わだつみ像』はどこにも存在していない。海が見える場所にもない。ただ一度、「三男」が「仮の除幕式」で立ったことのある小樽市春香山にあった本郷のアトリエからは海が一望できた。その「三男」こそは北大に置かれるべき像なのであった。

4 各地に「わだつみの声」像が再生している



資料 14

(和歌山市民体育館)

(和歌山市民体育館)

台座には『青年の像』とある。『わだつみの声』像ではない。不思議。本郷の死後鑄造である。建立当時の市長は立命館大学出身。

(北海道長万部 平和祈念館)

ここの作品群は、度肝を抜かれる。それは同じ目線に本郷の名作が並ぶからだ。広島『嵐の中の母子』像と京都の『わだつみ像』が同じ場所に建っている光景は息を呑んで見るだろう。



資料 15



資料 16

資料 15・資料 16 (北海道長万部 平和祈念館)

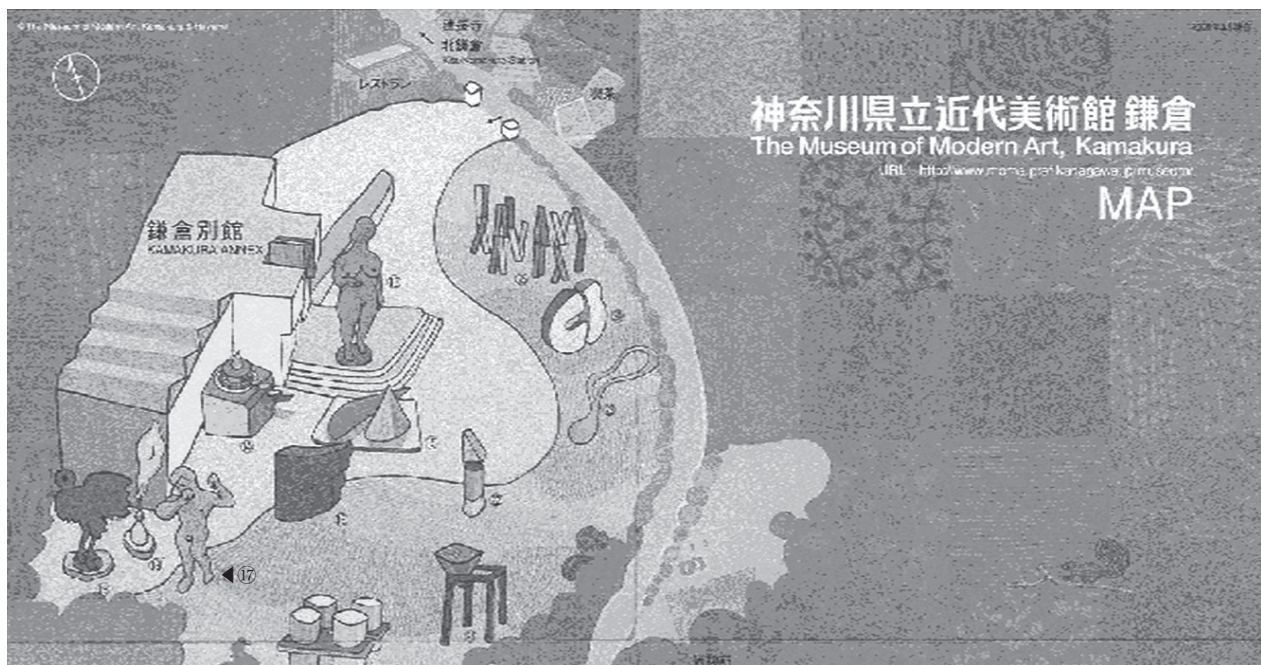


資料 17

(世田谷美術館前庭)

(世田谷美術館前庭)

世田谷は本郷が戦前戦後と終生暮らした場所である。美術館もすばらしいが、この玄関前のブナの木の下に本郷の作品はあまりに入口に近い。台座は低い、茂みが邪魔をする。



資料 18 神奈川県立近代美術館 鎌倉別館 パンフレットより

⑰が「わだつみのこえ」

この美術館の土方定一、匠秀夫、酒井忠康などの歴代館長は本郷新とのゆかりを持つ者たちである。匠、酒井は北海道出身。『わだつみのこえ』像はインターネット上では公開されていない作品である。エスキースとブロンズ像の2体が収蔵されている。

山梨甲州市・「わだつみ平和文庫 中村徳郎・克郎記念館」パンフレットにある『わだつみ像』のエスキース（資料 19）と『わだつみのこえ』の発行人であった中村克郎の写真（資料 20）がある。

やまなし NPO 情報ネットより

「わだつみ像は、戦没学生の悲痛な戦争体験を後の世に伝えようと彫刻家の本郷新によって制作された彫像です。」

http://www.yamanashi-nponet.jp/~digiken/wadatumi_opening.html



資料 20 中村克郎

資料 19

山梨甲州市・「わだつみ平和文庫 中村徳郎・克郎記念館」パンフレットにある『わだつみ像』のエスキース



やや不鮮明であるが、すでに像には白いラインが縦に見えている。穀田恵二氏は1965年に立命館大学に入学。「第15回不戦の集い」の文字から1968年と思われる。前掲『立命館百年史』によれば、1969年が破壊された年だが、「破壊の傷跡も痛々しい」像の前で16回目の不戦の集いは行われていた。

資料 21 「初代」(長男)の写真 立命館大学広小路「こくたが駆く」より
<http://www.kokuta-keiji.jp/column/nisshi/1123683789.html>



そんな通称があったのかはわからないが、「“きけ、わだつみの声” 像前広場」というキャプションがある。『わだつみ像』を上から撮影したもの。頭上に木はない。

資料 22 “きけ、わだつみの声” 像前広場
<http://uncletell.cool.ne.jp/manabiya01.htm>

5 破壊の時を越えて 生きている「わだつみの声」像

なげけるか

いかれるか

はた もだせるか

きけ

はてしなき わだつみのこえ

この歌は、学徒出陣の経験を持つ京都の藤谷多喜雄氏のもの。ここに『わだつみ』とその像の歴史が始まった。1950年4月22日、東京で戦没学生記念会（略称「わだつみ会」）が発足。それに先立つ3年間には、戦没した「学徒兵」を中心として残されていた文を編集して『はるかなる山河に』（東大出身者のみの戦没学生の手記）が出され、さらに、全国への応募を募り、その結果、題名を『きけ わだつみのこえ』として75名分を収録して出版した。『きけ わだつみのこえ』は1949年10月20日に刊行されて20数万部のベストセラーとなった。爆発的に日本中の人々の心を捉え、同名の映画にもなり、こうして彫刻にもなった。

1958年には一度、「学生のための団体として」の戦没学生記念会は解散。1959年には『新版 きけわだつみのこえ 日本戦没学生の手記』が出されて会の「再建」活動が始まる。この経過の一端は、『新版』（1959）の「この本の新しい読者のために」「あとがき」でも、初版の「解説」担当の小田切秀雄（おだぎり ひでお、1916年 - 2000年）が述べている。

『わだつみの声』像の制作を依頼しに彫刻家本郷新に会いに中村と行ったのは小田切。さらに、末川博立命館大学総長の「はしがき」も加わった。

「わだつみ」はこの本からこの言葉にもう一つ「意味」が付け加わった。ある年代から上は「わだつみ」の言葉から連想するのは「戦争」と「学徒」。

『きけ わだつみのこえ』の本の収益で、映画が作られ、『戦没学生記念像』（『きけ わだつみのこえ』の「あとがき」では、『わだつみの像』とすでに表記。）が作られる。「像」は完成し、いよいよ置かれるべき場所、東京大学へやってくるはずだった。

1950年12月4日、「像」は東大評議員会が設置を拒否。12月8日、東大では「わだつみ像設置拒否反対集会」が開催された。

6 刻まれた「1950 8 15」の訴えの意味

『わだつみの声』像に人々は誰のどのような声を受け止め戦前と戦後を生きたかの問題について、様々な議論が出されてきた。最も＜声＞をどのように聞いたかを反映したものは『わだつみのこえに應える - 日本の良心』（東大協同組合出版部編）であろう。ここには、それこそ思想的政治的には180度違うであろう人々の＜声＞の聴き方がおさめられていた。「どう応えるか」という問題は、その「声」の彼らがエリートであったとか、実はたいした教養もない学生たちであったとか、所詮は加害者ではないか、という後にわき起こる議論とつながる中身を持つてはいるが、それが民衆の声である、学生の声であるという押さえに立って謙虚に声を聞こうとしたものとして秀逸である。この像の「1950 8 15」という瞬間に本郷は何を込めたのだろうか。

人々が、この1950年をどう迎えていたのか。

- | | |
|------|--|
| 1/1 | マッカーサーが年頭の辞で、日本国憲法は自己防衛の権利を否定せずと声明する。 |
| 1/31 | アメリカ統合参謀本部議長が、沖縄強化・日本の軍事基地強化の声明を出す。 |
| 1/31 | アメリカのトルーマン大統領が水爆製造を指示する。 |
| 2/9 | アメリカ、共和党のジョセフ・マッカーシー上院議員が、国務省に57人の共産党員がいると演説する。マッカーシー旋風（赤狩り）が始まる。 |
| 2/10 | G H Q（連合国総司令部）が、沖縄に恒久的な基地を建設する、と発表する。 |
| 2/13 | 都教育庁が「赤い教員」246人に対して退職勧告を行う。 |
| 2/26 | イギリスが原爆保有を公表する。 |
| 2/27 | 平和を守る会が発足する。 |
| 3/8 | ソ連のヴォロシーロフ元帥が、原爆保有を言明する。 |
| 3/19 | ストックホルムで開かれた世界平和擁護者大会常任委員会第3回大会で、全世界に反対の署名を訴える「ストックホルム・アピール」を発表する。 |
| 4/22 | 日本戦歿学生記念会（わだつみ会）が結成大会 |
| 5/3 | 吉田首相が、全面講和論を唱える南原繁東大総長を「曲学阿世の徒」とラジオ演説で批判。 |
| 6/15 | 映画『きけ、わだつみの声』封切。 |
| 6/25 | 「朝鮮戦争勃発」。 |
| 6/27 | 朝鮮戦争：国連安保理で北朝鮮弾劾決議案が可決される。 |
| 6/28 | 朝鮮戦争：ソウルが陥落、北朝鮮の占領下に置かれる。 |
| 6/29 | 朝鮮戦争：福岡県など西日本各地に空襲警戒警報 |

- が発令される。
- 7/8 マッカーサーが吉田首相宛書簡で、警察予備隊の創設と海上保安庁の増員を指令
- 7/24 G H Qが新聞協会代表に共産党員と同調者の追放を勧告する。レッド・パージ。
- 7/26 朝鮮戦争で、国連軍の編成が完了する。
- 7/28 G H Qの勧告により、東京の全報道機関で共産党員と関係者の解雇の申し渡しが行われる。レッド・パージの実行開始。
- 8/10 警察予備隊令が公布される。
- 8/11 東京地裁、三鷹事件について竹内景助被告の単独犯行と認定、無期懲役の判決。
- 8/12 アメリカで、ローゼンバーグ(32)と妻エセル(35)がスパイ容疑で逮捕される。
- 8/14 世界平和委員会のプラハ・アピールが出され、朝鮮休戦と原爆禁止を呼びかける。
- 8/30 全学連緊急中央執行委員会がレッド・パージ反対闘争宣言をする。
- 9/1 閣議が、公務員のレッド・パージ基本方針を正式決定する。
- 10/13 政府が戦犯覚書該当者を除く1万90人の公職追放を解除する。
- 11/30 アメリカのトルーマン大統領が、朝鮮戦争で原爆使用も有り得ると発言する。
- 12/2 平壤を占領していた国連軍が韓国側へ撤退を始める。
- 12/4 イギリスのアトリー首相がトルーマン大統領と会談、原爆使用に反対を表明。
- 12/6 松川事件の第一審、「8被告の自白に信用性あり」とし死刑5名を含み全員有罪。
- 12/7 池田勇人蔵相の「貧乏人は麦を食え」発言。
- 12/14 国連総会で、朝鮮戦争停戦決議案が採択される。
- 12/16 アメリカのトルーマン大統領が国家非常事態宣言を公表する。
- 12/22 米軍が日本の基地で、朝鮮戦争で朝鮮半島に原爆を投下することに対する検討。

(岩波書店『近代総年表』、講談社『昭和二万日の記録』、小学館『二〇世紀年表』、『本郷新記念札幌彫刻美術館収蔵目録』より作成)

「朝鮮戦争」「原爆」「レッド・パージ」がキーワードだろう。もう戦争はしない、という日本国憲法が制定されたことが希望でありつつ、あらゆる局面で「逆コース」と批判される政策と風潮が作りだされている。1950年という年は、「講和」をめぐった議論の沸騰の時期である。戦争を戦った「外地」からまだ多くの者が帰り着かない状況であった。戦争は終わらず、兵士の生還を待つ多くの人々がいた。「わだつみ」が「戦没学生」だけだ、と多くの国民は考えてはいない。そんな肉親の区分けができるだろうか。戦死者や行方不明者はみな、「わだつみ」なのである。

7 1950年5月24日の「わだつみ」

わだつみは戦争で死んだ人々全てを指す言葉に

1950年5月24日版の『アサヒグラフ』を見る。写真の下には、「母も」と題して次のように書かれていた。

「この母は一人息子が大学に入った年にとられた 息子は南洋の読みにくい名前の島へいったきり 遺骨も届かなかった この母は常に息子の写真を肌身から離さない

この母はささやかな喫茶店を開いて息子と同年輩の学生と談笑するのを 唯一の生甲斐とする」とある。

「妻も」「父も」と残された人々の思いを次のページの写真で代弁していた。ここでは、「わだつみの声」の「わだつみ」はすでに「学徒」だけを表すものではない。「日本戦没学生慰霊祭」がどこの大学なのかはわからない。

「ある初夏の雨の日 戦歿学生の慰霊祭が 東京の某大学講堂で行われた」というキャプションのみである。

本文は小さな字でこう書かれていた。

「狂信の目は稚いうちに刈りとられねばならぬ。狂信が一度権威を身につけるや それは怪物となる。つい五年前までの日本 それは正に 憑かれた人々によって導かれ 憑かれた大衆によって支持され 滔々たる狂信の渦の中を人間性の破滅へと直進していた姿である。学生たち あの似非英雄的なりズム「泥濘の行進」に駆りだされていつた学生たちは自己の中の人間的なものと狂信的な権威の矛盾にもがきつつ仆おれていつた。」

と。これが当時の多くの＜声＞であったのだろう。



資料 23 『アサヒグラフ』

先の本文の続きはこうである。

「彼らの遺した手記 断片は押し潰された人間性の呻きである 愚かな戦いが終わって五年 巷の華麗さは人々に戦争の悲惨と恐怖を遠い夢として想いださせぬ。しかしここに如何にしても その惨禍を忘れ得ぬ遺族たちがいる。彼らは昼も夜も 我が子 我が夫の幻と共に生きている。それは世代の悲劇である。そして決して次世代の悲劇とさせてはならぬものである。しかも狂信の芽はいまも人々の周りに無数にある。耳をすませ「わだつみのこえ」が聞こえてくる。かすかに冷たく囁いている。「良識と判断力を持って 人間性を圧服される勿れ」と。



8 「わだつみのこえ」とは何か 何が聞こえるのか

「聞える（原文のまま）きこえるわだつみのこえ」というアサヒグラフの記事のどこを探しても戦没学徒の「手記」そのものは登場しない。あるのは、残された親や子、妻たち、後輩たち、あるいは死なずに済んだ学生の姿であった。残された者たちの写真を見ながら、菊池 敬一、大牟羅 良編『あの人は帰ってこなかった』（岩波新書 1964）を重ねてみる。帰ってこなかった男たちを待つ女の生の叫びが残されていた。われわれが聞くべき「声」は、わだつみの像の「目線」の先にもある。「わだつみ」たちと残された者をわかつ「海」。呼びかけても決して答えぬ「海」（わたつみ）は、残された生者の声をも飲み込んでいる。学徒＝わだつみ、とされてきた観がある。同じ場所で死んだのは何も学徒だけではない。学徒の目から見た、描いたという「手記」や映画がある。そうしたある意味狭い「分野」での論じ方も重要なのだろうが、学徒が出征した銃後に起きていたことは、戦争の末期に向かって直線的に、残された者へ跳ね返っていった。言論や教育の国家統制で締め付けてさえなお国民の中に厭戦的な気分が広

がっていくのは、肉親が骨となって帰ってきただけではなく自らも空襲にさらされる日々が不安となって訪れ、日々の中で自らを支え、平和な生活を取り戻すための模索は各種各場面で始まって行く。「学徒が」という限定的な論だけでは何も見えない。戦争というものが全く見えてこない。

札幌の藻岩山の麓には、屋根に2つのシーサーが載る建物がある。シーサーは普段網がかぶせられているので、よく見ないとわからない。1年に1日だけ多くの人が集まる瞬間がある。6月23日、沖縄慰霊の日。ここに刻まれた名前はほとんど全道くまなく網羅している。1万人を越えるが、死者たちは沖縄戦で散った北海道の兵士。沖縄戦で死んだ兵隊のうち最大は北海道入。

被害も加害も必ず両方ともあるが戦争の「証言」がこの刻まれた名前。どんなに勇猛果敢に、戦果をあげてもそれは自分が生きて相手がどれだけ死んだか、という数量でしかない。

9 南原繁はなぜ、何を拒否し、『わだつみの声』像は漂流したのか

12月8日のガリ版刷りの「経過報告」が示すもの

手元の1950年の「日本戦没学生記念会」「12月8日」の日付のある「経過報告」を出来る限り復元する。

経過報告

今回私たち記念会が、戦没学生記念像を東京大学構内に建てたいとの念願のもとに像の寄贈を申し込んだのに対し、十二月四日づけで別掲の理由で「受理できない」旨の回答に接しました。

「再びこの声がくり返されてはならない」と叫びつつ戦火の中に斃れていった学生達が、いささかの人間性も許されなかった環境において、求めてやまなかった平和と幸福な生活は、生き残った私たちがこの声を心の底に刻みこんで手を互（い）につなぎあわせること以外によっては実現されないと思います。侵略戦争の犠牲となった小さな魂のもだえを永遠に象徴し、後の世に訴える戦没学生記念像は、今大学のしきたりの前に建立を拒否されたものであります。

「かかる記念碑はオックスフォードにもありハーバードにもあると聞いています。……それはいたましい戦争の思い出と共に、尊い人類平和のおや石の一つとなるものでなくてはならないということが思われてなりません。」記念像建立事業にあたって、遺族の一人山根徳太郎氏はこう書簡をよせられました。「家には病人もあり、今は苦しいのでお送りできませんが、勤勉手当が出ましたらお送りいたします。」このような手紙と共に基金を送ってくださった遺族もありました。

今私たちは一片の拒否状を前にして、九月以来の大学当局と行（つ）てきた折衝経過を思いおこすとき、憤おりに身のわななくのを感じます。

九月上旬、製作者本郷氏より像完成の通知をうけ、像の寄贈を東京大学南原学長に申入れました。南原学長は、「私の一存で行かないので評議会にかけて御返答する。私個人の意見としては上野か日比谷に建てた方が良いと思う」と述べられました。私たちはこの像を東大に建てることにさして疑問をもっていませんでした。戦没学生の像であるから学内に建てることは当然のこと。日本戦没学生の手記「きけわだつみのこえ」は、東大戦没学生の手記「はるかなる山河に」の発展したものであり、而も戦没学生記念会は東大協同組合の総意によって生まれ、記念像建立基金は組合からの寄付金の中に計上されていたもの。それ故私たちは南原学長が喜んで御快諾されるものと思っていたのでありました。

ところが十月になっても御返事がないので下旬、進藤事務局長にお伺いしたところ、「その件はまだ評議会にかけていない。しかし私の見透しでは困難だ」といわれ、（一）戦争中武勲の勇士市川紀元二氏の像があったが、戦争後再建しないことになっている。このように時勢によって変わるものでは困る。（二）本学に関係のある学術関係者以外には建てないしきりである。（三）像が深刻すぎる との理由でありました。そして余談であるがと前置きされて、「あの像は裸体であり、本学には女子学生もいることだし風紀の点でも……」とも語られました。その後、柳田理事長が南原学長に面会を申込まれたところ、多忙とのことで容れられず、遺族の一人として板尾理事が進藤局長にお会いしたが、満足すべき結論をうることができませんでした。しかし各評議員の先生方にお会いして建立協力をお願いしたところ、有沢教授、尾高教授をはじめ多くの方々が賛成してくださったので、私たちも意を強くして本郷新氏とも連絡をとり、十二月八日を除幕式としたいと思い、その計画をすすめていたのでありました。

一方私たちの計画を聞いた学生諸君の中から、大きな支持がわき上がり、建立促進の運動が開始されました。十二月（＊筆者註十一月の誤りではないか。）二十八日になってやつと評議会に議題になりましたが、「問題が重要だから慎重にして次回に廻す」ことになりました。私たちは何故に問題が重要なかわからなかったし、賛意を表明された先生方が、余り発言されなかったことも不可解でしたが、なお建立実現に努力することになりました。学生諸君は建立委員会を設けて準備をすすめていましたが、建立が無理ならば、せめて十二月八日に建立と切りはなして披露式をやり、先輩を追悼記念して申し出てこられました。

十二月八日 それは沈黙していたが故に防ぎうべくして防ぎえず、ついに数多の悲劇をおくり出し、「わだつみのこえ」をうみださざるをえなくなった日であります。いま朝鮮の動乱の緊迫化と、原爆の使用が云々されているときに、私たちがこの日を記念し、戦没学生を追悼することは、実は意義深いことでもあります。それであればこそ、私たちはよろこんでその申し出に応じたものであります。

しかるに十二月二日、私たちは進藤事務局長から呼ばれ、次のような質問を受けました。「学生が動いているが、記念会の立場如何？ こうした動きは十二月五日の審議を前にして悪い影響を与えないか」。私たちはこれにたいして「学生諸君の動きには感謝している。もし私たちが煽動と言われるならば、それはとんでもないこと。かえってこうした学生の熱意が評議会に反映すれば、なおさら結構ではないか」と答えたのでありました。

十二月四日大学は緊急に評議会をひらき、記念像受理を拒否すると共に、学生委員会は「披露式は建立を前提としているから、建立が禁止された以上無意味である」との理由で学生諸君の計画をも禁止されたのであります。

「諸君が陣中より切々の純情をつづって送ってくれた書簡に我らいくたび涙したかしれぬ。洵に諸君は凡そ学園とかけはなれた厳しい軍律の世界に身をおき、殊に遠く故郷を離れた戦地にあって一しほ大幸を恋い学

間を思いつつかかる師をさへ師として懐かしんでくれた。我らしばしばその一人一人の名をよんで天地に訴えたい衝動をどうすることもできぬ」

これは誰の言葉でもない。今回拒否した当事者南原学長が二十一年三月四日、東大戦没並びに殉難者慰霊祭における告文の一節である。更に学長は続けていわれる。「ましてや諸君を生み、これまで育て家庭相団欒した諸君の父母兄妹の心を思えば、今次の戦争が無名の師だっただけに、人間として同胞として転々痛嘆と同情にたえぬものがある」

これほど情理をわきまえた学長が何故に○○○○○（*註 判読できず）であろうか。「我らは諸君の意志をつぎ新日本建設と新文化の創造に邁進する」といった学長は、どうして平和の像と、武勲の士の像を同一視するのだろうか。

「わだつみのこえをくりかえすな」と叫ぶのはたやすいであろう。だが平和と幸福の生活を実現することはむづかしいことでしょう。だが私たちは知っている。何ものにも恐れずたゆまない平和の叫びが全世界をうずめていることを。何ものにもさえぎられない戦争の呪いが全日本にみちみちていることを。

この像が平和を象徴しているが故に、戦争の危機を前にして南原学長のいわゆる「国民理性」の象徴である大学で拒否され（る）にいたったのである。かつては激励しつつ教え子を送った大孝ですら、その霊の復帰を望まない日本では、この像のための一坪の土地すら提供されぬかもしれない。

私たちは声を大にして全国の人々に訴えよう。平和を愛する全人類の怒りが結集したとき、記念像は必ず魂の故郷にかえることが出来ましょう。私たちは時局に仰（迎）合した大学当局にたいして、あくまで抗議を続けるとともに、像建立の実現に努力し、平和と幸福の実現にまいしんするでありましょう。

（附記）

十二月八日、私たちは再び進藤事務局長によばれ、「学生が憤慨して今日の集会を強行するというが、もし像をかかえて正門前で警官隊ともい（み）合うようなことになっては………」と言われ、返す言葉もなかったことを付け加えておきます。

十二月八日

本戦没学生記念会（註 原文は縦書き）

東大当局の「像」の拒否について中村克郎が『兄の影を追って』（岩波書店）で理不尽な拒否の様子を生々しく再現している。この「経過報告」の文章が全てを物語っている。南原総長の「共産党の影響排除が本音」であると立命館大学福岡良明准教授は『「戦争体験」の戦後史——世代・教養・イデオロギー』（中央公論社 2007）で指摘している。だがそれでは一つの像が建てられ、これほど後に兄弟たちが生まれるに到った説明にはならないだろう。民衆の願いは読めない。

10 「市川紀元二」の「銅像」とは何か 「再建」されていた東大出身兵

「経過報告」に登場する「市川紀元二」の「銅像」とは何か。



資料 25

「市川紀元二」は「いちかわきげんに」と読む。「戦搜録」(<http://www1.linkclub.or.jp/~oya-wm/kigenjifile/kigenji.html>)と「日本掃苔録」(<http://www4.airnet.ne.jp/soutai/index.html>)と、静岡連隊史を手がかりに探る。

市川紀元二は中尉であった。日本陸軍では、生きながら特別進級したものは「明治以来終戦まで、市川紀元二たった一人しかいない」という。

「明治六年二月十七日、静岡県磐田市生まれ。一高から東大工学部に進み、三十年七月に電気工学科を卒業。電気工学を修めた新鋭技術者だった市川氏は日露の戦雲急を告げるや、少尉の階級で勇躍征途についた。(中略) 北方戦線の遼陽戦にのぞんだ市川少尉は歩兵第六連隊の二中隊小隊長として右翼を進み、首山堡北大山麓の敵壘に迫った。時の二中隊長は松井岩根

であった。未明の攻撃命令に接した松井中隊長は最も信頼する市川少尉に鉄条網破壊を命じた。(中略) 少尉は幅十メートルに渡って鉄条網を破壊することに成功。午前九時、市川少尉は味方砲兵の攻撃が強まり、敵砲火が他方に集中しているのを看破して猛然と突進、石合戦の末に北大山の一角を奪った。一番乗りであった。敵は日没まで抵抗したが後に敗走。難攻不落の首山堡攻略の血路は市川少尉らによって切り開かれたのである。(中略) しかも一番乗りの勇士が一年志願兵の工学士と知った軍幹部は二度驚いたという。(中略) 遼陽戦の後に松井大尉が参謀に転出し、市川中尉は新任中隊長として奉天戦に望んだ。この戦いで中尉はロシア軍を干洪屯に迎え撃ち、惜しくも散華した。銃眼に顔を寄せたとたんに右眼を貫かれ、さらに腹部に被弾したという。(中略) 東大総長山川博士は戦死の報を聞き『私を顧みず公に殉じた君はもって学徒の亀鑑とすべきである』と、銅像の建設を発起した。当時学内には『大学は學術の府であり、學術または大学に功勞のあつた人でなければ記念像を建てない建前がある』という反対意見も出たが、総長の英断をもって建設が踏みきられた(日露戦争で戦死した東大卒の学徒兵は二十八人に達した)。

この銅像は、東大職員の手により太平洋戦争時の金属供出を免れ、戦後は地下室に隠されて守り続けられた。昭和三十二年八月に、銅像は市川氏の出身地に因み静岡県護国神社に移されることになり、連隊跡地(現駿府公園)から移築された静岡連隊の元将校集会所建物前に安置された。」と、ある。「松井岩根」は「松井石根」(まつい いわね)の誤り。松井は南京事件の責任を問われ、A級戦犯として起訴、最終的にはBC級戦犯として死刑、靖国神社に合祀。

「市川紀元二」と「わだつみ像」は同列のものとして論じられること自体が誤りだ。東大は新しいモニュマンを大学として迎え入れるべきだった。「GHQの指示で撤去」という記事もある。いずれにしても進藤事務局長がわだつみ像を拒否した時も市川のプロンズ像は東大に隠されており後に静岡の護国神社に再建されていた。それも東大の意志なのだろうか。

11 「わだつみ像」の「本名」と「還暦」の意味について

国際平和ミュージアムの像は、東大でのピラやプラカードにも書かれ末川も呼んだ『わだつみ像』と「省略形」が本名化させられている。引き倒され、校舎が移転し像を再建した1981年の衣笠キャンパスでの天野学長による記念碑にも『わだつみ像』とあった。1974年6月、かつて破壊された長男、再生された次男に続きいわば「三男」として北大に登場すべきものであった像の「仮除幕式」がひっそり海を見下ろす小樽の本郷のアトリエで行われた。すでに初代制作から四半世紀が経っていた。

1979年は、『きけ わだつみのこえ』が出て30年であった。1979年10月31日の『朝日新聞』には「『わだつみ像』札幌にも」という記事があり当時立命館大学の天野総長は、北大に置かれるべきもう一つの『わだつみの声』像が存在していたことを新聞の取材で知って、「兄弟」がいたことを喜んでいて、とある。

『きけ わだつみのこえ』（一文字空白。1949年10月20日刊行時、表紙をめくるとそうあるからだが、表紙は『きけわだつみのこえ』で筆文字で文字をつめて書かれている）から30年という時は同時に、『わだ

つみ像』にとってもほぼ同じ歩みであった。

立命館国際平和ミュージアムのホームページ上でも『わだつみ像』である。本郷新記念札幌彫刻美術館に立つ像は本郷新の字で、冒頭の「なげけるか・・・」が刻まれ、そこに、確かに『わだつみの声』とある。

石膏原型には「1950.8.15」と刻まれている。「1950年」という年こそは、いみじくも「きけわだつみのこえ」という言葉が、「きけ」と呼びかけるような新たな「わだつみ」たちが登場しかねない暗雲たなびく状況が生まれる年であった。朝鮮戦争である。

残念なことに、立命館大学国際平和ミュージアムの「わだつみ像」は、一般に写真などで紹介される際には、円柱形の地下一階からそびえ立つ「台座」の上に、1階部分からの像が見える。だが決して足もとの四角い部分まで近寄ることができない。「1950.8.15」の刻みも知られぬまま、もうすぐ「わだつみ」はその時から、60年目、「還暦」を迎える。全国一斉に「還暦」を迎えようとするこの「わだつみの声」像は60年目に何かを訴えることになるだろうか。

12 中村克郎の残した「わだつみ像縁起」から

「わだつみ像縁起」と題された、中村克郎氏が作成した文書がある。これは本郷新記念札幌彫刻美術館に残された手書きの資料の写しを元に井上みどり学芸員が書き直し、打ち直したもので、1993年5月の日付。これを手がかりに「わだつみ像縁起」を年表風に概括する。『わだつみ像』の誕生に直接関わりその日の天候まで記憶し、最後まで『きけ わだつみのこえ』の編集に携わり、その「こえ」にこだわり続けた中村克郎氏でなければ残せない「縁起」である。「縁起」には、どういうわけか、東大に一瞬でも置かれていたことは省かれている。（「わだつみ像縁起」と題する文章は、『おやじとせがれ』（本郷淳）にも、中村の同じ題のものがある。こちらは文章である。）

中村克郎「わだつみ像縁起 1993年5月」（※註は、筆者）

年	月 日	で き ご と
1947	11.30（日）	東大戦没学生の手記『はるかなる山河に』を東大協同組合出版部より刊行。
1949	10.20（木）	日本戦没学生の手記『きけわだつみのこえ』を東大協同組合出版部より刊行。 （※註 利益は像の制作資金の一部となった。）
1950	1	寒い日、小田切秀雄氏と中村克郎と二人同道にて世田谷梅ヶ丘の彫刻家本郷新氏宅を訪問。 （※註 小田切邸は本郷家の近所にあった。「おやじとせがれ」（本郷淳）、「白と黒の会展」（世田谷美術館）の記述より。）

年	月 日	で き ご と
1950	4.22 (土)	曇り。日本戦没学生記念会（通称わだつみ会）を東大山上御殿1号館にて結成。その席上で本郷新氏より像の制作意図を説明。台座は、東大工学部助教授丹下建三氏案。 (※註 当時、文京区本郷の東京大学構内の山上（さんじょう）会議所の御殿1号館であると思われる。現在は、山上会館が建設されレストラン「御殿」がある。)
1950	6.15	(※註 朝鮮戦争始まる 本郷新は制作中にラジオで知る。エスキースには「1950.6」とある。)
1950	8.15	完成。 (※註 中村も言う「完成」とは何を指すかは分からない。彫刻の足下にある「1950.8.15」と彫られたものを指すのだろう。報道や出版物でもこの日付で「完成」とあるものもある。『立命館百年史第2巻』でも同様だが、なぜ、「8.15」を像の「完成」とするかは疑問である。)
1950	9	(※註 第14回新制作展へ『わだつみのこえ』出品)
1950	12.4 (土)	東大評議員会、戦没学生の記念像の構内設置拒否を決定。 (※註 当時、東大総長は南原繁であった。彼は1945年から1951年まで総長であった。)
1950	12.8 (金)	わだつみ像設立拒否反対集会を東大法文経1号館25番教室にて開催。風邪気味の無理をおして出席された講師の宮本百合子氏にとっては最後の外出となる。氏は翌年1月21日急性白血病にて死去さる。伝研○野信男氏により病理解剖された。 (※註 ○野信男氏は草野信男氏と思われる。) 通夜の席上で「百合子さんはわだつみ会が殺したっていうじゃないか」と久米正雄から言われた。
1951	5.26	(※註 東大五月祭2日目、午前9時半に搬入。法文経28、29番教室前陳列（東京新聞26夕刊）。「教室前」はどこか、「廊下」である。 ※註 『わだつみのこえ』（日本戦没学生記念会）No.7 6月7日号には、「もん着のすえ五月祭最後の日に4時間だけ太陽をあびたわだつみ像」の記述と写真がある。また、本文中に引用した神田文人氏の柳田謙十郎理事長との写真も東大の図書館前の風景であり、搬入前後で「4時間だけ」の中でのことかと思われる。)
1951	11.25	(※註 1951年11.16の日付の美術館のスクラップブックには「戦没学生記念像 わだつみの声」とあり本郷新の解説で新聞記事が載っていた。その横に「本社主催第15回新制作京都展25日まで丸物百貨店にて」とある。『わだつみの声』は、第14回新制作展に出品されているが、京都巡回の記録は見あたらない。しかし、この「第15回」には『塔 わだつみのこえ』が出されているのであるが、京都巡回展に出ていたかは研究中。『わだつみのこえ』像は立命館大学に立つ2年前に一度、京都に違う形で立っていたことになり京都市民は見ていたことになる。この『塔 わだつみのこえ』は女性像である。)
1951	12.8	(※註 立命館大学で全立命戦没学生追悼慰霊祭。わだつみのこえ像を迎えようの提案。末川総長、「学生諸君を再び戦場に送ることは許さない」と挨拶。)
1953	11.8	(※註 像、立命館大学到着。全日本学園復興会議開催中。)
1953	11.11	(※註 像の乗った小型トラックが先頭に、末川総長の乗ったオープンカー、そのあとに学生が続いてパレード。京都大学から、立命館大学へ向かって像を迎え入れようとする学生に対して警官隊が襲いかかり流血。荒神橋事件。)
1953	12.8 (火)	京都立命館大学校庭に設立。台座の言葉、執筆は時の総長末川博氏による。 (※註 「不戦の誓」が読まれる。京都御所のそば、広小路校舎に台座と共にあった。その台座の行方は不明である。銅版は、現在平和ミュージアムに。戦没学生追悼会が午後2時から研心館前で。本郷新講演。大谷大学の仏教聖歌合唱。7日は前夜祭。北大よりも参加。『毎日新聞』『京都新聞』より)
1954	12.8	(※註 建立1周年を記念し像の前で「第1回不戦のつどい」開催。以後毎年開催)

年	月 日	で き ご と
1969	5.20 (火)	朝、わだつみ像は引き倒され、破壊さる。わだつみ像は最初から言うとうと6基鑄造された。 立命館大学（2基。一つは1969年破壊され、現在立っているのは再鑄造されたもの。立命館大学平和ミュージアムの玄関ホールに立っていて、通行人にも見ることができる。） 札幌宮の森、札幌彫刻美術館（本郷新氏の旧アトリエ）。 北海道札幌の本郷氏の母校の中学校現在の北海高校。 北海道長万部の平和祈念館（工藤豊吉氏が私財を投じて1984年に設立されたもの。） 神奈川県立近代美術館の別館前。（匠秀夫氏の尽力による。） （*註 別館は現在の鎌倉、匠秀夫は北大文学部出身。北大わだつみ像建設期成会の文書にも、本郷新とその作品についての文を寄せている。本郷の作品集に解説を書いている。神奈川県立近代美術館の館長であった。） 世田谷美術館正面入口前。 計6基、5カ所である。 （*註 立命館大学の像の再建経過 1970年わだつみ会阿部知二理事長らで再建実行委員会結成。 1970年5月20日「像再建をめざす全学集会」開催。 1970年11月28日「次男」広小路から円山公園までパレード。 図書館内で保管。 1970年12月8日、長男と次男の2体を前に第17回の「不戦の集い」開催。 1975年12月、「わだつみ像建立立命館大学実行委員会」結成 1976年5月20日「わだつみ像建立記念式典」衣笠学舎体育館。 衣笠キャンパスの図書館で除幕、展示。防弾ガラスケース入り。台座はない。 1992年の平和ミュージアム開設と共に現在の位置へ移動。本来の台座にあった2枚の銅版は、像とは別に掲示されている。最初の台座そのものの行方は不明。） （*註 1985年に建てられた和歌山市の『青年の像』への言及はない。1993年には立っていたはずだが、中村は把握していない。） （*山梨の中村の遺志をついだ記念館にはエスキースが存在している。東京のわだつみ記念会館には、像はない。エスキースを置こうという動きが存在している。）

「わだつみ縁起」年表は、いくつかの「像」の建立については触れていない。像の「縁起」だけだと、戦前と戦後もただの「連続」に見える。中村克郎にとっての像の「縁起」もまた「像」の側、つまりは、「戦没学生」と大学の側からしかとらえられなかったのかもしれない。「頼んだ側」からの意識である。頼まれた本郷と、中村以外の「頼んだ側」の意識を掘り下げる仕事は実は「破壊する側」の意識を検討より重要である。

13 全国の「わだつみの声」像たち

「わだつみの声」像について全国にどれだけ兄弟姉妹が存在しているのか。

全国の「わだつみの声」像一覧

建立・制作年		名前 他	設置場所
1950.8.15	石膏原型	わだつみの声	札幌本郷新記念札幌彫刻美術館 この石膏原型は常設展示ではない。また後の表に掲げたように石膏原型はあと2つあることになる。 「8.15」は足下に刻んであるということでありそれが「完成日」ではないだろう。
1973 1974 1981	ブロンズ	戦没学徒記念像 わだつみの声	北大わだつみ像建設委員会 小樽市春香山本郷新アトリエ前庭（1974年6月9日）、本来は北大に設置されるはずであるから「仮除幕式」→札幌市中央区宮の森本郷新アトリエ移設（同年9月）→1981札幌彫刻美術館開館、アトリエ隣接地に。2007運営母体が変わり本郷新記念札幌彫刻美術館として再出発する。
1970 1976 設置 1992	ブロンズ	わだつみの声→わだつみの像→わだつみ像	再铸造・衣笠→立命館大学平和ミュージアム 1992
1950 1953 1969 2007	ブロンズ	わだつみのこえ→わだつみの像→わだつみ像	東大 1950 → 立命館大学広小路 1953 → 1969 年破壊学内保管 → 2007 年永久保存・非公開で保管場所移動
1985 設置	ブロンズ	わだつみ像	札幌豊平区 北海高校 野外
1983 開館	ブロンズ	わだつみ像	長万部平和祈念館 野外
1986.2 設置	ブロンズ	わだつみ像	世田谷美術館 野外
1984.4 設置	ブロンズ	わだつみの声	神奈川県立近代美術館 鎌倉 野外
1985.6.20	ブロンズ	青年の像	和歌市民体育館前庭 野外
1989 寄贈	ブロンズ エスキース	わだつみのこえ	慶応義塾大三田図書館地下1階階段脇 大学にあるものとしては立命館と慶應だけだが、エスキースである。
	エスキース ブロンズ	わだつみ像	山梨 わだつみ平和文庫 中村徳郎・克郎記念館 おそらくこれは、70センチのものか。
	エスキース ブロンズ	わだつみ像	横浜 生麦事件記念館 最近になってその存在を知った。立命館校友会のホームページにも紹介されている。
1990.7.1 寄贈	エスキース ブロンズ	わだつみのこえ	長野県駒ヶ根市文化会館すずらん公園。屋外にエスキースが建っている。 これが「原像3体の一つ」とあるホームページで指摘されるが「原像」をどう捉えるか。三種類の大きさのうちの一つ、ということなのか。エスキースではないわだつみ＝原像であればわかる気もするが。

(本郷新記念札幌彫刻美術館ホームページ、ウェブシティサッポロ、『本郷新作品集』、『本郷新作品目録』 『朝日新聞』 79年10月31日、『北海道新聞』 75年8月14日、各新聞記事検索、インターネットでの検索などで作成。)

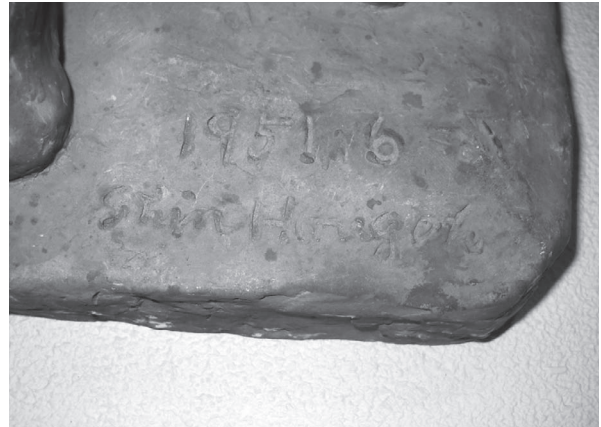
この他、石膏や粘土で出来たまさにマケットのような「わだつみ像」がひょいと出てきているが、卒業式で配布したらしいとか、わだつみ像建設資金作りで寄付してくれた人に贈呈したなどのエピソードとともに出てくる。「作品」としてはカウントしない。「兄弟」たちは増え続けてきた。それは多くの人々がこの像に寄せる思いがいかに強かったかということの証明に他ならない。「わだつみの声」には、次に見るように「兄弟姉妹」たちも存在していた。

本郷新記念札幌彫刻美術館収蔵の彫刻「わだつみ」像一覧

建立年・制作年	素材・大きさ	名前 他
1950	石膏 78 × 33 × 17	わだつみのこえ
1950	石膏 215.5 × 60 × 51	わだつみのこえ
1950	石膏 34 × 15 × 10	わだつみのこえ
1950	ブロンズ 190 × 96 × 75	わだつみの声
1950	ブロンズ 77.5 × 33 × 19	わだつみのこえ
1950	ブロンズ 190 × 96 × 75	わだつみの声
1951	石膏 コンテ / 紙 コンテ / 紙	塔「わだつみのこえ」 塔「わだつみのこえ」 塔「わだつみのこえ」 (註 いずれも女性像)
1974.6.9	色鉛筆・水彩・クレ パス / 紙 54.5 × 39.4	わだつみ像除幕式
		(註 『札幌彫刻美術館 本郷新作品目録』2005より作成 この他にも、「わだつみのこえ」と名がついた「別の作品」が写真・スクラップでは2つばかり見られる。)



資料 26
『塔 わだつみのこえ』



資料 27

資料 26 は本郷新記念札幌彫刻美術館収蔵の『塔 わだつみのこえ』で女性像、石膏像である。資料 27 の足下に刻まれたのは「1951 6」である。

彫刻『わだつみ像』登場年譜

年	月 日	内 容
1950	9	新制作展 14 回展『わだつみのこえ』出品 東京都美術館
1951	2	新制作展 15 回展『塔 わだつみのこえ』出品 新制作京都展 9 月開催
1951	5 26	「5 月 26 日門前での一悶着の後、像は校内に入り正門と安田講堂をつなぐ銀杏並木の片隅に建てられ、一時間の期限を 3 時間超える 4 時間だけ東大の土を踏んだのである。父も当然行っており、本来あるべき姿を視察した。」 (『おやじとせがれ』 p 132) 『東京新聞』、『わだつみのこえ』では、東大五月祭 2 日目、午前 9 時半に搬入。「法文経 28, 29 番教室前陳列」である。2 日目だと 27 日になる。「4 時間だけ」だと 13 時半となる。また外にいて土を踏んだのは何時間なのかは調査中である。論文に触れる神田文人氏、柳田氏はこの時間帯に撮影したのだろう。
1952	1	秀作美術展 3 回展『塔 わだつみのこえ』出品
1953	1	秀作美術展 4 回展『わだつみのこえ』出品
1953	12	立命館大学広小路校舎に『わだつみ像』建つ

1956	7	現代美術 10 年の傑作展に『わだつみの声』 出品
1969	5 20	立命館大学『わだつみ像』 破壊される
1970		立命館大学『わだつみ像』 再建
1974	6 9	小樽市春香山アトリエ前庭で除幕式
1979	9	札幌市中央区宮の森本郷新アトリエへ移設
1980	8	全道展 35 周年記念展に遺作コーナーとして『わだつみのこえ』 出品
1981		札幌彫刻美術館開館
		(註 この間は「縁起」に記載した)
1992		立命館大学国際平和ミュージアムに移される

(『おやじとせがれ』、『本郷新作品目録』、『本郷新作品集』より作成)



資料 28
(『おやじとせがれ』より 1951 年 5 月 註
この右下の文字が「み像」と読める。搬入
時には、「わだつみ像」とされたらしいこと
がわかる。)

14 学徒出陣と大学
**わだつみの声像の置かれるべき場所はな
かったのか、北海道大学の場合**

「なぜ東大は自らが戦場に送り出した学生の魂しい
を迎え入れようとしないのか・・・・・・私は
ただ作品が平和を心から愛し、生命の尊さのため
に再び 20 世紀の野蛮な行為をくり返すまいとする
多くの善意の人々の魂にふれることを願っていま
す。像は何処に建ってもいいのですが、もしこれ
を断るような人があるならば、その人のそばにこ
そ像は建っていたいでしょう。」(本郷新 『婦人民
主新聞』 1950 年 10 月 27 日)

東大総長というその時代の最高の知性と教養を兼
ね備えているはずの南原繁は内諾をしていた『わだ
つみ像』の設置を拒否した。
「東大当局」だけではなく、わだつみ像を巡って北
海道でも「拒否」の運命が待ち受けていた。『わだつ
みの声』像が置かれるべきであった北海道大学(以下、
北大と略称)の歴史の中ではどのように戦没学徒や
学徒出陣が記述されているのか。
「一九四三年(昭和一八)十月二日、政府はついに
在学中徴兵猶予の措置を停止した。在学中徴兵猶予
を受けていた学生生徒に対し、十月二十五日から臨
時徴兵検査を行い、合格者は十二月一日一斉入隊す
ることとなった。このとき第二種までが合格とさ
れたから、徴兵適齢に達したほとんどの学生生徒が
現役兵となった。ただ、理工科・医科・農科の一部・

水産科の一部の学生生徒は現役兵となっても入営を卒業まで延期する措置がとられた。したがって十二月一日に学園から兵営に直行したのは、法文系、農科の一部、水産の一部の学生生徒であった。いわゆる学徒出陣である。

北大では農学部農学科、農業経済学科、農業生物学科、水産学科の一部（生物系）の学生、農学実科、林学実科、予科の生徒がこれに該当した。これらの学科は学部生のほとんどが入営してしまったため、壊滅状態となった。予科・実科の生徒のうち徴兵適齢に達したものは、同様に学業半ばにして入隊することになった。文部省の指示により、入隊者のうち翌年九月卒業・修了予定の学部三年目学生、予科・実科第二学年生徒には仮卒業（修了）証書が与えられ、翌年九月に正式証書が留守宅に送られることとなった。それ以下の学年のものは休学の扱いとなった。同じ十二月二十四日徴兵適齢が一年引き下げられ、一九歳となった。」（『北大百年史』より『戦争下の北海道帝国大学』p293より）

「（中略）卒業期の繰り上げについては評議会でもさまざまな意見がでた。兵力確保の要請とあればやむを得ないが、希望としては三カ月を限度とし、一時的な措置としたい、卒業期の直前に決定されても困る、夏休みをつぶして授業をしてもいい教育ができるとは限らない、軍事教練は問題だ、などである。卒業期が繰り上げられても、高等学校・予科からの大学入学期は従前のままであり、予科修了期は従前どおり翌年三月であった。そのため、専門部・実科卒業生で学部入学を志望する者には三カ月の空白期間ができてしまった。」

「年限短縮は翌四二年度には六カ月となって九月卒業となり、高校・予科も半年短縮されて四二年九月卒業となった。各学部は四二年九月に卒業生を送り、十月に新入生を迎えたわけである。半年短縮は年々続けられたが、一九四三年一月政府は予科・高等学校の在学年限を二年に短縮し、四三年度入学者から適用することとした。同時に大学の在学年限は三年に復した。

日中戦争開始以後、教職員の応召出征するものが多くなった。（中略）応召者の大部分が助手・副手層であったことを示している。教官の応召について、一九四四年八月現在の調を見ると、教授・助教授の応召20、助手の応召58であった。助教授については現員の約一割、助手については現員の四分の一に当たる。部局別に見ると医学部の応召率が特に高く、助教授現員の

四分の1、助手現員の半ば近くが応召している。」（前出「第6章2節 戦時下の北海道帝国大学」p291-292より）

北大から多くの未来ある若者と研究者が戦場に行き散った。学部によっては「壊滅状態」であったのだ。その打撃を負いながら北海道帝国大学は、北海道大学として戦後息を吹き返したのだった。

15 語られぬ、記憶にも記録にも残らない北大の「わだつみの声」と学徒出陣壮行会裏面史 宮沢・レーン事件

北海道大学で北大史の講義を担当する教官と話す機会があって確かめたことであるが、北大史の講義において『わだつみの声』像について触れることはこれまでなかったし、その存在についても知らなかったという証言を得た。北大史の中でも直接に『わだつみの声』像の設置運動があったことについては、歴史として継承もされていない。このわだつみ像と学徒出陣とを接続するもう一つの出来事がある。1941年12月8日、「大東亜戦争」の開始、真珠湾攻撃のその朝、北大生宮沢と北大のアメリカ人教官夫妻は特高警察に逮捕される。1943年6月、北大生宮沢俊幸は外国人との交流をスパイ活動とされて網走刑務所につながれた。その弟晃は慶應義塾大学の学生であった。晃は1943年10月21日の神宮外苑の「出陣学徒壮行会」で「壮行の辞」を読むことになっていたが、突然、役を降ろされてしまう。晃は翌年1944年、海軍予備学生を志願してパイロットとなり、1945年8月9日、長崎の原爆の被害調査で何度も長崎上空を飛行。この時の被爆が原因であろうと思われるが40歳の若さで死亡した。獄中にあった兄弘幸は出所後、47年2月肺結核で死亡した。

晃が述べることになっていた「壮行の辞」は、同じ慶應義塾大学の奥井が述べて、今日でも学徒出陣といえは奥井が思い出される。文部省ニュース映像に残る東大の学生、江橋慎四朗の「答辞」の演説とともに見られる。だがこうした出来事も、いつの間にか、「壮行の辞を読むことになっていた学生が急に体調を壊して代読となった」などという情報が「裏話」として流布されている。「急に体調を崩した」学生は宮沢になってしまうのである。「宮沢・レーン事件」は、学徒出陣50年の報道の中で、もう一度クローズアップ

された(『学徒出陣50年』松井覚進1995)。その後、北大総合博物館に、宮沢レオン事件の小さな解説コーナーができた。

16 北海道大学の『わだつみ像』建設趣意書(1968年6月ごろ)を読む

北大の『わだつみ像』建設趣意書はタイプで打たれたB4サイズのもの。表紙は立命館大学の広小路校舎の「長男」。これもまた台座と共に左斜め前から撮られたものが使われている。

『北大わだつみ像』と仮に呼ぶが、この像の「建設理由」は3つ書かれていた。その一つ目には、

「北大在学中に学徒出陣で動員され、不幸にして非命に斃れた人の数は必ずしもそれほど多くはないでしょう。けれども戦争の犠牲になった世代の幅をもう少しひろげて、大学卒業後間もなく応召され、戦没された人たちも含めて考えますと、決して少ない数とは云えないように思われます。これらの人たちに対する大学としての公式の慰霊の行事は何一つ行われてなかったのではないのでしょうか。たとえ戦没者の数が少なかったとしても、こうした行事は、数の多少で左右されるべきものではありませんまい。そこに北大の戦後史の空白があり、そしてこの空白は今からでも何としても埋められなければならない性質のものではないのでしょうか。とりわけこの戦争に生きのこった世代の人たちにとつては、このことは義務でさえあるように思われるのです。」(『建設趣意書』より)

「学徒出陣」をその用語の厳格な使用対象者だけを含むのではないことを「趣意書」はすでに述べている。大学と戦争というものを考えようという意志が強く見られる。賛同した教職員の数と学部は多岐にわたる。戦争は、大学の修業年限を繰り上げた。学問よりは、今、すぐに戦争を遂行する兵士たち、とりわけこの学徒たちに期待されたのは実は、大学生の「学力」や学問の成果というよりは、下士官としての「力」、ここでも下士官としてのいわゆる「一般教養」の力であった。読み書きそろばん、という一般教養だけではなく、戦闘機や戦車、船の操縦を学ぶ基本的な学力と教養を彼らに求めたのであろう。「卒業」は無理にさせられ、召集されたのは事実なのだ。学生も教官もまた召集されていた。

『わだつみ像期成会趣意書』が指摘した「北大の戦

後史の空白」は埋められたのだろうか。結論から述べると、『北大百年史』、『北大125年史』でも、『北大わだつみ像』についてはその議論すらも載っていない。「会」ができ、『北大わだつみ像』は完成し、形として「北大」の名前を台座に刻んで、現在、本郷新記念館札幌彫刻美術館にあってもだ。「北大の戦後史の空白」は心ある大学人の中でも手つかずのままなお空白として継承されてしまった。建設期成会事務局は、「北大教養部人文系資料室内」に置かれていた。その「教養部」も今は無い。戦争に送り込まれた学徒、戦争へ従属する学問の府となることが本来の大学の使命であったかどうかの総括は、やはり先の100年、125年史にはない。「北大にもう一度、わだつみ像」を、という運動となって再び現れることもなく過ぎた。その記憶と記録の継承はおろか接続の努力も残念ながら、学徒出陣60年という節目にも現れなかった。しかし、それはまた記録と記憶の掘り起こしの作業から始まる。

17 1974年、仮除幕式へのアピール(1973.11) 小樽春香山に立った「わだつみの声」像

『仮除幕式へのアピール』(北大わだつみ像期成会1973.11)には以下のようにある。

「(中略)像はすでに鑄造され、現在制作者本氏の春香山のアトリエに保管されております。しかし、当初からわれわれが念願してきた北大構内に像を建設し、同窓戦没者を慰霊しようという計画は、種々の障害。とくに周知のような大学紛争の経過の中で、今日にいたるも実現できず、また近い将来に実現できる見通しもたっておりません。」

「エルムの庭にたてたいと願った当初の志を、われわれは決して放棄したわけではありません。また、たとえ、最終的に北大構内保管設置を断念せざるを得ないような状況がつづいたとしても、各位のご了解を得られるような、できるだけ望ましい場所に設置されるように、最善の努力を傾けるつもりでおります。」

「ところで、建設運動を開始してから今日まですでに5年という長い年月を経過しており、どのような事情があったにもせよ、このまま制作者のアトリエに像を放置しておくことは、心情的にたえられないばかりか、御支援いただいた各位、そして制作者に対する社会的責任からも、許され難いことのように思われます。

そこで、本郷氏の御希望もあって、とりあえず明年、

春香山の氏のアトリエの庭にわだつみ像を仮設することにいたしました。現場は海を見下せる小高い丘の上で、札幌バイパスからも望見できる位置にあり、この像が佇立するのにはふさわしい場所であります。」
「この計画とは別箇に、われわれは大学、または同窓会連合を主体とする公式の戦没者慰霊祭が行われることをかねてより希望しており、その前提として同窓戦没者名簿の資料の作成につとめてまいりました。」

期成会は、仮の除幕式を終えて事務局を解散し、実行委員会へ移行した。会代表は触媒研究所所長戸谷富之氏。1975年8月13日の『北海道新聞』では「どこへ行く わだつみ像 北大」という見出しのもと「今夏も仮住まい」とあり、小樽の春香山にあることを報道している。1979年10月31日付、『朝日新聞』では、『わだつみ像』札幌にも」という見出しで「学園紛争のあおり 本郷新氏宅で眠る」としている。本郷は春香山のアトリエを手放して札幌市中央区宮の森にアトリエを移し、そこで、「わだつみの声」は「眠る」ことが記されている。仮のまま、時は止まったままのようである。

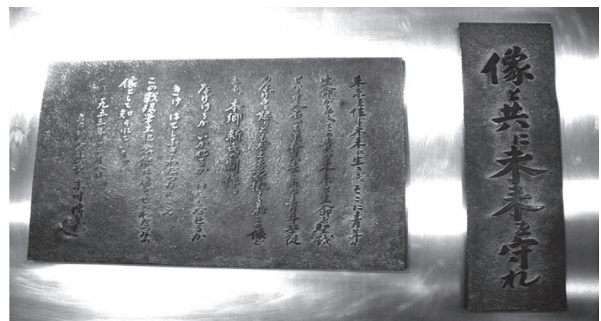
18 「学徒」戸谷敏之の青春と遺された業績

『わだつみのこえ』(111号 1999年11月p66)では、岡田裕之法政大教授が、戸谷敏之をとりあげた。『日本戦没学生思想』(法政大学出版会2008)にその後まとめられている。「戸谷敏之」は、「滝川事件当時の1933年に逮捕・投獄・処分から転向を経験し、学問分野に道を選んで業績を遺し、フィリピンに戦死した」(同書p248)とある。魚雷で負傷しマニラの病院に入院。病院が解散し終戦を知らずに逃走し、戦死した。ある。岡田が、「弟富之宛の1943年の手紙から」と紹介したものには、「日本肥料史」を研究することになったこと、『近世農業経営史論』、『切支丹農民の経済生活』を出版し、「札幌の本屋にも出てゐませう」と結んであった。戸谷富之は優れた若い研究者であった。『日本戦没学生思想』の文章では「戸谷敏之」はわかるが、その弟のことは全く書いていない。弟は1943年に札幌、北大で研究者であった。後に北大の触媒研究所長にであり、北大わだつみ像期成会実行委員長の戸谷富之氏であることに気がついた。戸谷富之氏は、『わだつみ像』に限りなく近い人物であった。人々は、ここでも「わだつみのこえ」を継承していこうとしていたのである。わだつみ像の「兄弟」たちは皆、求める

人たちがいて生まれた。ある者は破壊され、ある者は名前を変えられ、ある者はひっそりと除幕式を行い……こんな数奇な運命をたどる「わだつみ」兄弟のような彫刻の存在を平和ミュージアムも語らない。

先の福岡氏もその著書で立命館大学のわだつみ像の破壊に触れた。だが「破壊」の一方で全国で「創造」されてきた「わだつみの声」像たちの戦後史には一切触れてはいない。

2007年8月私は、立命館大学のどこかにこの初代、破壊され引き倒された「長男」がいるに違いないと思い続け、様々なつてを頼った結果、対面がなかった。対面のその朝、それまで言われていた図書館にはないことがわかった。学内でも公式にはその存在は明らかにされてはいない。国際平和ミュージアムから離れ移されたばかりだった。大学の保管庫で私は引越第1号の見学者であった。ガードマンが立ち、写真撮影禁止のこの〈長男〉は保管され一般には非公開である。「死」と描かれた胸の文字の跡も生々しく、陥没した顔面、へこんだ足、ちぎれた手。それはただのブロンズの固まりの姿ではない。しかも自立していた。壊した、壊されたというこの事件の論評もよい。だが1度でもこの〈長男〉の前に立ってから、論じることはないのか。そこにあるのはただの銅と錫の固まりのブロンズのはずだが。今も自立して立つこの「わだつみの声」の語る「声」を聴くことはできないものか。



資料 29

「未来を信じ未来に生きる。そこに青年の生命がある。その貴い未来と生命を聖戦という美名のもとに奪い去られた青年学徒のなげきと怒りともだえを象徴するのがこの像である。本郷新の制作。

なげけるか いかれるか はたもだせるか きけ
はてしなきわだつみのこえ

この戦歿学生記念像は廣く世にわだつみの像として知られている。

一九五三年一二月八日 立命館大学総長 末川博記す」

浮き彫りの銅板が平和ミュージアムで展示されているが、長男の台座の一部であろう。台座は行方不明。

19 本郷新の戦争への態度と苦悩美術と戦争そして本郷の苦悩

戦時中、美術雑誌は何冊かに統合されるがその一つが『美術』。第4号の「後書」は次の文である。

「この大戦争が凡ゆる面で大転換を余儀なさしめてゐるやうに、美術に於てもその例外たらざるを得ない際、この記録画を中核としての戦争画が今後の我国美術の動向に 興える役割は大なるものあることを信ずるのであります。この機に新しい世紀の日本美術が樹立さるゝとすればこの戦争画から出発するのではないかと云ふ説が肯定できるやうに思はれます。」(『美術』4号『後書』)

『美術』第4号は「戦争画特集」。ここに本郷新は書いていた(後述)。そもそも『美術』が、本郷新記念札幌彫刻美術館に寄託されたおびただしい本郷の蔵書には存在していなかったからこれまで全く検討の対象にはなっていない。「ヒューマニストとしての本郷」でありその仕事の一部に＜好戦性＞や軍国主義をことさら見いだす必要はなかったからだろう。一つそうした記事を見つけたところでヒューマニストとしての本郷の全体としての評価は変わらない。本郷は戦争を捨て、平和を希求することを頑固に選択した。戦争画を賛美した瞬間を本郷は捨てた。『わだつみの声』像が『戦没学生記念像』であったことで、作者本郷とは別に、多くの学徒たちの思いのみしか検討されないが、作者本郷が台座に遺した「なげけるかいかれるか……」の文字が刻まれた札幌の『わだつみの声』像への本郷の執念とも言える動きは何を示すか。本郷もまた、嘆き、怒り、黙っていた。1940年から日本大学美学科講師であり学徒を送り出す側の大学人でもあった。本郷もわだつみの声を聞き取ろうと苦闘したのだ。

20 戦争画の頂点 藤田嗣治「戦争画製作の要点」をめぐって

あれほどあこがれ、過ごしたフランスのドイツ第三帝国による崩壊について藤田がファシズムの本質を捉えていなかったのだろうか。藤田は『美術』第4号で、

「戦争画制作の要点」を書いた。今日、藤田の戦争画の「原点」として様々な論文に引用され、孫引きされている文はこの号であった。

「前線は勿論、銃後一億国民が戦闘配置について、米英撃滅戦いよいよ苛烈な決戦のこの秋に際し、美術界もまた、奮然として未だ前例なき戦争展を開催し得た事は、実には大御稜威の御光の御賜と感謝する次第であり、更に我々はこの大戦争を記録画として後世に遺すべき使命と、国民総決起の戦争完遂の士気昂揚に、粉骨碎身の努力を以て御奉公しなければならぬ。(中略) 或る戦争画の傑出せる作品は絵画の史上に於いて傑作であり得るのである。名前を列举して挙げる必要はないが、世界の巨匠の戦争画は、実に名画として其の実証を明らかにして居る。」

(藤田嗣治「戦争画制作の要点」『美術』第4号 1944)

戦後、藤田は日本国憲法記念はがきをデザインしていた。それはまた戦前の戦争画のはがきとの「断絶」もなく同じように制作されていた。

21 1995年 50年後の戦争画を読む目の曇り

本郷は『美術』4号で戦争画家田村孝之介の「戦争画」の評を寄せたのだ。田村は文化功労賞の画家。戦争画は美術展(1944)に出された田村の『佐野部隊長還らざる大野挺身隊と訣別す』(1944)が存在していた。

『芸術新潮』1995年8月号は、「戦後50年記念大特集」として、「カンバスが証す画家たちの『戦争』」が特集されている。ここには田村の『佐野部隊長還らざる大野挺身隊と訣別す』が載せられている。「永久貸与目録」にも確かにこの1枚だけが存在していた。元になった絵を1944年の『美術』4号のカラー口絵から転載する。(資料30)

これをその50年後の美術誌自身による「評価」と思われる解説を読むと驚愕するだろう。

「まさに死闘となったガダルカナルの密林で、死地に赴く兵士に恩賜の酒を注ぐ場面を描き出したのが図版」
「まるで映画! ドラマチックに描かれた密林の人間ドラマ」(『芸術新潮』1995年8月号)

「挺身隊の兵士たちを思い切り画面の奥に置き、ジャングルの木々の間から差す光の中での劇的な場面を作り上げている。」(『朝日美術館 戦争と美術』1996年1月15日)



資料 30

どうだろう。まるで戦時中の美術評論と同じではないか。藤田がいみじくも言った

「或る戦争画の傑出せる作品は絵画の史上に於いて傑作であり得るのである。名前を列举して挙げる必要はないが、世界の巨匠の戦争画は、実に名画として其の実証を明らかにして居る。」(前掲、『美術』4号「戦争画製作の要点」より)

『佐野部隊長還らざる大野挺身隊と訣別す』というタイトルと説明が絵になればどうだろう。何のためにだれのために何を描きたくてこの絵は描かれたのだろうと思わないだろうか。素直に絵と対話できるのか。

1995年の『芸術新潮』は、1944年に読者が陸軍美術展のその場にいるような錯覚に陥る「戦争画」として論評していた。「戦争が・・・」という但し書きがついてはじめて絵が読めるのが戦争画の本質。果たして戦争画を純粋に芸術の仲間に加えられるか、といえはやはり独立し得ない。むしろ戦争画それ自体がモニュマン的な役割を背負ったものとして「鑑賞」すべきではないか。50年後の美術誌は煽るような解説とキャプションをつけたのだ。『芸術新潮』は、『佐野部隊長還らざる大野挺身隊と訣別す』について、その絵の題名のどこにも存在しない言葉を「死闘」「ガダルカナル」「密林」「死地」「兵士」「恩賜の酒」という6

つのキーワードをこの絵から「読み取り」、使い、説明したのである。それらの6つのキーワードを「情報」として読者にすり込んでいる。

22 本郷新が評価した田村孝之介のガダルカナルの『佐野部隊長還らざる大野挺身隊と訣別す』

田村孝之介の「ガダルカナル」を書いた作品は、2枚あった。

『芸術新潮』(1995)、『朝日美術館』(1996)にも、戦争画のアメリカでの発見と写真撮影による『毎日グラフ臨時増刊 太平洋戦争名画集 日本絵画史の一断面 アメリカ国防総省が押収した記録画』(1967年11月3日)にも一枚目の『佐野部隊長還らざる大野挺身隊と訣別す』がカラーで大きく載せられていた。確かに返還されたのは一枚。しかし、確かに『美術』4号には、2枚がセットで載っていた。

当然、先の『芸術新潮』『朝日美術館』にも、『美術』4号で紹介された「二枚目」もあるのだろうかとかを食っていたのだけがない。2枚目についてはその行方も載っていない。この1枚目だけがあれば田村のガダルカナルの戦争画の説明として事足りるのだろうか。田村の2枚目の『大野挺身隊敵高等司令部に突入奮戦す』

は、『美術』4号で一枚目と同時に本郷が論評した。一枚目の『佐野部隊長還らざる大野挺身隊と訣別す』は藤田、中村研一の絵について3枚目に何とカラー口絵で載って掲載されていた。しかし、もう一枚、『大野挺身隊敵高等司令部に突入奮戦す』は、実際はどんな色でどのようなものかよくわからない。よく探すと『美術』4号の中程に『昭和十八年度陸軍作戦記録画』として白黒での掲載。そのため実際はどのような配色なのかはこの時点ではわからない。私は「絵はがき」になったこの2枚の写真を手に入れた。では一体、二枚目はどんな絵であるのか。

この2枚を連作の映画、アニメーション、あるいはモンタージュと見て、ガダルカナルも挺身隊の説明もなしに独立した意味で評価できるだろうか。

藤田が指摘した「名画」のようにあるいは『芸術新潮』のように見ることができるか。

1967年の『毎日グラフ』は、戦後アメリカが押収した戦争画を、中川市郎の撮影によったもの。当時はまだ日本には戻ってはいなかった「太平洋戦争名画集」である。作家千田夏光は「作家とその作品」として67点の解説を『毎日グラフ』で行っている。

ガダルカナルでの戦いが写真報道ならばどうか。間近に実際の血しぶきがとぶ戦場を、殺人現場の二枚目をどんな想像力をもって見たらよいのだろう。強調する想像力、あるいは切り捨てる、思わない想像力(命や平和を想像しない)という鑑賞力を、絵を見る子どもから大人までに植え付けるには、やはり行ったことがない、見たことのない場面を実際の体験者たちの話を聞き取って再構成する絵画に頼るのである。なぜ、聞き取ってまで書かなければなかったのか。そして、描かれるべき聞き取られるべき真実は何であったのか。『毎日グラフ 臨時増刊』(1967年11月3日)で、千田夏光の「解説」は全て「戦争の解説」であった。田村と絵の紹介を載せる。

「明治三十六、大阪府出身。太平洋画会研究所、信濃橋洋研究所で学ぶ。二紀会員、戦時中ビルマ戦線を歩く。主要作品は『少女と金魚』『海風』『黒い扇子と裸婦』など。軽快な描写で、明るく楽しい作品が多い。昭和17年8月7日設営隊2000人、陸戦隊230人の全滅にはじまったガダルカナル島の死闘は8月21日、一木支隊(一木清直大佐=916人)全滅、九月14日川口支隊(川口清健少将=3996人)の壊滅、10月25日第2師団(丸山政男中将)の攻撃挫折(連隊長自決)、11月10日よりの第38師団(佐野忠義中将)の苦戦と惨たんたる戦闘の連続だった。

くわえて制空権を失ってから、弾薬はもちろん、食糧も補給もゼロにひとしく数千人が餓死し、残りの万余も生理的に戦闘能力を失い幽鬼のごとく密林にひそむのみにいたった。かくて組織的作戦を考えることは不可能になり、所在の各隊では比較的健康状態のよい兵隊を数人単位で集め挺身斬込隊をもって散発的攻撃をするしかなくなった。兵隊は若干の食物をとくに与えられ、体力をいくらかでもつけたうえ、上司と訣別、出撃していったという。(後略)」(前掲『毎日グラフ』)

ガダルカナルの真実は「餓死」者を多量に出し、「全滅」につぐ全滅。「転戦」しく玉砕した兵士達ですら何故ここで戦い、餓死するのか、本当の戦力は白兵戦では全くもたないということも知らずに死んでいたことを隠蔽することにもなる。「わだつみたち」も、あるいはわだつみにすれすれでならなかった、あるいは全く怖い目にもつらい目にも会わずに生還した者も(これはもう一方では「加害者」として生還したということも意味しているが)含めて聞かねばならぬく声は、ただ「証言」やこうした戦争画を見るだけでは意味をなさない。そこからつなげて考える、考え合う、真実と向き合う対話や討論をくぐっていくことが必要なのだ。その蓄積こそが現代の教養である。

伊原三郎と宮本三郎と田村孝之介の鼎談、「わたしたちは歴史を記録した制約の中での芸術」で語った。

「(中略)最後がガダルカナルのあれで、これは、僕はとてもそのときには行けなかったから、行かないで描きあげたのです。最後がフィリピンの特攻隊の現地出発です。これは、もうそのときには、戦争は峠を越していたわけです、僕は、命からがら帰ってきたが、それは、描いているあいだに焼けちゃった。爆撃をくらって家もろとも無くなった。ガダルカナルは、生存者が3人いたのです。課題をもらったときに。そうして、部隊長とそれから参謀付きの中佐の人と少尉が、三人病院で寝ていたので、そこを訪問して、非常に克明に聞いたのです。ジャングルの状況や、地面からなにから、全部耳だけで聞いて、それでつくりあげたのが、幸いに生き残って退院した人を見て、非常に感心してくれた。」(『毎日グラフ』前掲 p88)

23 本郷新の田村孝之介の戦争画への評価

「彫刻家 新制作派会員」として本郷新は何を書いたのか。

「佐野部隊長還らざる大野挺身隊と訣別す」

「快適な作品である。素直な構図と渋滞のない素描が、屈託のない画面を作り上げている。この作者は構図力に優れた作家であるが、この作品のテーマが、訣別と云ふ異常な緊迫の情景であることを、画面の中央に集中的に、単一的に取り扱って見せてくれたことは心理的に自然でいい。殊にその中心部に、密林に射り込む光線を集中した点は、解釈の成功である。左右に書かれた陰の人物も、静止した中にそれぞれ変化を与え、右の4人の中の一人が、まぶしさうに空を見上げて背面のみの単調を救ひ、左の方では、折れた大木と小さく動く一人（これは少し小さ過ぎるが）を配して、左右の変化を考へる点など、とにかく、さりげないやうで周到な心使いが見えるし。樹木の位置、光線の配置（間隔、分量）なども、よく画面を引き締めている。この絵の成功が第1に構図に起因することを感じるのである。渋滞のない素描は、運筆からくる愉快さを供なって、一種の気安さとなつてはゐる。それだけに、何処か浅く、スナッフ風に感ずるのであるが、それは決して苦になる程ではない。寧ろ問題は色彩にあるのではなからうか。

南方の密林や、それに射し込む陽光を見たことのない自分には、あの色彩が実際に近いか遠いかは知らない故、記録的な点では、明確な判断はつき兼ねる。しかも、全体の色調に接して、少しも虚構を感じなかったことも確かである。にも拘わらず、色彩的に魅力がなかったと云ふ実感だけは、筆者は正直に述べなければならぬ。

つまり、色彩と云う点では、光の部分にも陰の部分にも、色の役割（性格）をもつテーマに対して駆馳する余地があるやうに思はれるのである。筆者は、色彩からの感動を受けなかった訳である。部分的に云へば、中央の地面は、この絵の中で最も色の生きてゐる部分である。それは、密林の中の湿気をも感じさせる。光の色、その光に照らし出された緑と他の緑との溶合、調和等の細部についても少しく感想もあるが、それは省き、ただこの絵の快適な心地よさを、作者の構図力と素描力による点を記し、且つ、全記録画中の数少ない優秀作の一であることを挙げて置くに止めたい。」（前掲『美術』4号）

絵そのものに戦闘の場面はないし、戦闘的でもないが「優秀作」と判断している。

「大野挺身隊敵高等司令部に突入奮戦す」

「狭い室内の混乱の状景を、これだけにまとめ上げるには、随分苦心があったらうと察しられる。而もその雰囲気をも一応書き出し得てゐる点は成功である。壁に映った恐怖の手の影の着想もさることながら、光線の配分によつて混乱する人物の配置を構図的に配置しやうとする配慮は重文首肯できるところである。その点は、この作品の第一の魅力である。ただその結果から云へば、左の人物の構図的価値が多すぎそのために、手前の、手前の机の角度と相まって、画面が2分するかに見える。人物の大きさと光の価値の過分が、この絵の絵画的中心（向かつて中央より右奥へ）を分散させてゐるのは惜しい。この左の人物の光を弱めるか、さもなくば、中央の二人の勇士と全く異なつた動き少ない姿をとつたならばきりりと締まつたであらうと惜しまれるのである。

剣をかざす3人の勇士が、それぞれ姿体は違ひながらも、活動性と云ふ点では価値的にぶつかりあつてゐることやその素描が、共通して、ポーズ的に感じられる点などが、この作品に、何処か舞台的虚構を感じさせてゐるのである。3人の勇士の頭の線に高低をつけても、幾らかこの「共通」を救ふことが出来たらうと思ふのである。

多くの敵兵や左下の転んだ椅子、それに引つかかる受話器、手前に散乱する書類など、他の処理には無理がないのに、主要の人物の不自然のために、努力だけの効果が出ず、作者もさぞ心残りであらうと同情される。

よく書き込んだ画質（マチエール）は重く厚い部分と、軽く薄い部分とがあるが、さして苦にならず、それよりも、鎮静感こそ與へはすれ、悽愴感を與へないこの作品の色彩に、筆者は物足りなさを感じた。このような画面の効果としては、今少し刺激的であつていいのではないかと思はれる。左上の火の如きものも、赤の役割を果していない。即ちこの絵の色彩の、やや装飾的な効果が、却って題材を殺してゐると云ひたいのである。この画面のでは、作者は、他の今一つの作品「訣別」よりも、特に色彩的に配慮してゐることを感ずるので、筆者は敢へてこの点を指摘したくなるのである。作者よ、許し給へ。」（前掲『美術』4号）

戦闘の場面で一枚目より残酷さや戦闘シーンではよりリアルな「戦争画」だ。本郷の二枚目に対する評価はどうか。より戦争画の意味がでるやうにと要求している。「勇士」の「剣」と書く。勇士の剣の切っ先は人間に向く。「挺身隊」は、何とすでにきちんと姓名



大野挺身隊敵高等司令部に突入奮戦す

大東亜戦争陸軍作戦記録画(陸軍省貸下)

田村孝之介筆

資料31 大東亜戦争陸軍作戦記録画(陸軍省貸下)のはがき 筆者蔵

もはっきりと出されている。ガダルカナルの攻防は、情報として新聞やラジオを通じてイメージされ操作されているものである。情報操作を重ねて行く以外に戦争を遂行する道はないということであり、美術の力を、軍部も美術家もそして何より国民も知っていた。

「・・・(略) 支那事変以来戦争画が少数の志ある人々によって制作されだしてから8年、今日ではおそらく世界に類を見ないであらう堂々たる様子を『戦争画も到々ものになった』と云はれるこの陰には初期の人々の荆棘の忍苦を始め、火のやうな熱意と鏝骨の精進のあつたことは云ふまでもありませんが、多大なる軍の指導と援護があつてこそその成果が得られたと云つて過言ではないと考へられます。」(『美術』第4号「後書」)

彩管報国体制とはたとえそれが個人の軍国主義への共感から始まりイコール国民全体の考えとしてのみ成り立つというまさに全体主義の中にありそれを平気で語ることができるのだ。

24 『彫刻の美』で本郷新は何を変えたのか

『彫刻の美』(資料32・資料33・資料34・資料35) 左2冊は戦前版。右2冊は戦後版。本郷の『彫刻の美』は戦前戦後と版を重ね、死の直前に再刊。生誕100年に合わせて復刊。戦前版と戦後の版では中身

には殆ど異同はない。本郷自身も最小限にしか直さなかった。しかし明らかに異同がある。1905年12月9日生まれであった。1941年12月8日は真珠湾奇襲攻撃であり、朝から臨時ニュースがラジオで鳴り響く時で誕生日前日に、「大東亜戦争」が始まった。

「原稿をかきあげた時は、日本が太平洋戦争に突入した昭和16年12月で、富山房から初版が出たのが、17年の4月であった。9年前のことである。」(『彫刻の美』より「再刊に際して」 1951年7月10日)

戦前戦後も通して残っていくべき彫刻論、彫刻のテキストとしては白眉のものである。3度目の版である「増補新訂版」には評論家匠秀夫が「あとがき」で簡単に「自序」と「再刊に際して」という本郷の書いた文について触れている。第4版目では、匠と同様に神奈川県立近代美術館、世田谷美術館館長であった酒井忠康が書いている。問題なのは、この「自序」。この「自序」には秘密がある。それは全てを並べて見なければわからない。名著『彫刻の美』が光り輝くだけにそれぞれが時期を違えて買い求められ愛読され時代を超えていくことは作者もうれしいだろう。読者も連帯感がある。だが本文以外が書き換えられていることは戦後に出された版のものだけを読んだ者にはわからない。そこには本郷の文化と戦争観とでも言えるものがある



資料 32



資料 33



資料 34



資料 35

種「変節」や連続と非連続があるのではないか。

よもやその「自序」の日付の前後に異同があることなど考えてもみないだろう。本郷の誕生日は12月9日である。戦前戦後版の「自序」を検討する。

「・・・文化といふことが此頃盛んにいはれてゐる。数年前までは、文化といふと何か必要以外のことのやうに思ふ人が多かつたが、今日では、文化といふもの、ほんたうの意味や値打を知る人が多くなり、殊に大東亜共栄圏（新しい日本）の建設には、政治や経済と同時に文化の建設が、ほんたうに必要であるといふことを人々が真剣に考へるやうになつてきた。従つて、文化といふもの、たいせつな要素になる芸術について、もつと多くの人々が心をくばり、理解するやうにならなければ、新しい文化の建設の歩みは、おくれしてしまふのである。専門家だけでなく、多くの人々が文化を打建てるのであり、また文化は多くの人々による喜びと幸福とをあたへるものでなければならないのである。

このやうな意味で、形の芸術、立体美の芸術である彫刻について、このさゝやかな本の中から、何ものかを知り、何ものかを感じ、何ものかを夢見ていたゞけたら、これは1人著者のよろこびばかりではなく、新しい東亜（日本）の美の文化のために、この上もない幸といはねばならない。

最後に、この本の出版のために、いろいろ力ぞへ下さつた友人諸兄にたいし心から感謝し、御礼を申し上げる。

昭和十六年十二月八日 大詔渙発の日（削除） 著者」

この「自序」の太字が原文で、（ ）が戦後に書き直された。戦前の版とは違う。削除された「大詔渙発の日」は、戦後にはない。残ったのは、「昭和十六年十二月八日」だけであり、まさか「大詔渙発の日」が書いてあったとは思ふまい。

「文化といふもの、ほんたうの意味や値打を知る人が多くなり、殊に大東亜共栄圏の建設には、政治や経済と同時に文化の建設が、ほんたうに必要である」（『彫刻の美』より「自序」部分）

とは本郷の本音の言葉なのか。戦後版の『彫刻の美』の「自序」と共に私も読者の一人としてあつた。ヒューマニスト本郷の作品のどこからも「大東亜共栄圏の建設には、政治や経済と同時に文化の建設が、ほんたうに必要」だという「声」は聞こえなかった。「自序」の＜初版＞の「昭和十六年」の日付を見て、戦後の版も当然同じだと思ひ込んできた。

「日本民族」とその優秀性を説く本郷の冒頭の主張を読む限りでは、後者がまるで戦前の版のようにも思ふことができる。戦後、本郷は「自序」で、「大詔渙発の日」の自分まで削除し簡単に変えてしまったのか。

25 改めて北大の『『わだつみ像』建設趣意書』（1968年）を読む 破壊と放浪の理由

『『わだつみ像』建設趣意書』を読む。表紙は立命館大学の広小路校舎の「長男」である。破壊される前のものである。この「趣意書」は、「北大のエルムの庭に建設したい」として3つの理由を挙げていた。

「第1に、北大在学中に学徒出陣で動員された・・・人たちに対する大学としての公式の慰霊の行事は何一つ行われてこなかった・・・そこに北大の戦後史の空白があり、そしてこの空白は今からでも何としてでも埋められなければならない性質のものではないでしょうか。」

「第2に、戦没学徒の慰霊と鎮魂の志は、云うまでもなく、同じ犠牲を繰り返してはならないという、平和への祈りと、不戦の誓いへとつながってゆくべきも

のでありましょう。」

立命館大学の「長男」の建立の趣旨とほぼ同様見てよいだろう。『わだつみ像』が世に出て18年後にまた再び今度は北海道で「趣意書」が出されるにはさらに、3つ目の「建設理由」があった。

「第3に、以上のような私たちの志を結晶化し、それを後の世代へ贈る上に、本郷新氏の「わだつみ像」は、きわめて好適なものであると思います。何故ならこの作品は別稿のように芸術的価値においてすぐれたモニュメントであるばかりではなく、作者の本郷氏は札幌出身で北大ともゆかりの深いヒューマニストであるからであります。たまたま開道百年を迎える年に、この像を建立することは一つの文化的記念事業という意味もおびてくると思います。」

「趣意書」にジャンタルジューの「詩人の光栄」(渡辺一夫訳)をのせている。北大文学部卒業の評論家匠秀夫(後に神奈川県立近代美術館、世田谷美術館館長)が「本郷新氏の人と作品」を書いた。

「第3」の像設置の理由に「開道百年」が出てくる。「開道百年」と学徒出陣はどこかでつながるのだろうか。「開道百年」で制作を依頼され、彫刻としてのモニュマン性を問われた『風雪の群像』はおそらくはアイヌ老人が立っているように座っているように、ほかと較べて描き方が「弱い」とされるのだった。この像も破壊されそして再生された。

日本という国家の100年が連続か非連続かという問いが伴っていた。「明治から100年続いた」という言い方が出来る反面、日本国憲法によって原理的に戦争を放棄した大日本帝国から日本への転換の姿をそこに多くの国民は見、また、アイヌ民族の側からの日本という国家がしたアイヌへの仕打ちの総括がないままの無批判な「100年記念」への問いがあった。

同時期に、この『北大わだつみ像』もその募金額を1968年6月の呼びかけ以来5ヶ月足らずで目標の3分の2が集まったことが報告されている。当初は北大の戦没者の数は少ないと見ていたのに、実際には「全学で300名を超えるのではないか。」というように大きな発見もあった。だが、鑄造され台座が完成しても、北大で除幕されなかったのだった。学生運動と安保闘争に北海道「開道百年」が重なった大きなうねりに北大の彫刻は飲み込まれた。ここは決定的に「長男」が抱えた運命とは違う要素であった。

『北大わだつみ像』は、唯一、予定された学園に一度も立つことがなかった悲しい像なのだ。

「北海道開拓百年を迎える1969年、様々な記念事業が行なわれた。その一つに北海道主導により、札幌大通公園に「ホーレス・ケブロン像」「黒田清隆像」がそれぞれ1967年に設置される。(中略)民間の手で名も無き開拓者をたたえ記念碑を作ろうという運動が1968年8月に起こった。これは、北海道百年の土台となって働いてきた人たち、一部の指導者だけではなく、名もなく土に埋もれた先人たち—農民、漁民、抗夫、アイヌの人たち、さらに流刑の囚人たちも含めた人たち—の労苦をたたえ、記念するとともに新しい未来への展望をあらわすため、「北海道開拓記念碑『風雪の群像』をつくる道民の会」(会長更科源蔵)が発足、作品制作を本郷新と本田明二に依頼した。制作費は、道民などによる募金と寄付でまかなうこととした。(中略)作品もレリーフから厳しい自然、飢えと闘いながら開拓に血と汗を流した3人の若者とアイヌの老人、若い女性の5人の群像となった。作品完成が近づいた1970年5月、新聞等で「風雪の群像」の最終構想が公開されると、アイヌの老人のフォルムが差別にあたるとする公開質問状が出され、新聞紙上で論議された。

問題とされたのは、アイヌの老人が木の切り株に腰掛けた構成を、和人より低い立場に追いやっているとした点である。相手の主張は、アイヌを立たせよという作品の変更を迫るものだった。具象作品である本郷の作品は、見る人によっていかようにも解釈することが可能である。しかし、各自の解釈をもとに作品自体の変更を迫るものに対し、本郷は否と主張した。本郷は、「和人と同様にアイヌを立たせることが、人間として平等の扱いであり、贖罪的な姿勢であり、アイヌが腰をおろしていれば不平等で贖罪の意識が無いとするあなたの観念論を私が受け入れられなければならない理由がどこにあるのでしょうか」と反論した。また、「5人の群像全体の中で、アイヌの姿が他の和人の姿に対しどのような関係におかれ、どのように響き合っているかによって、平等も不平等も屈辱か、蔑視かも決定されてくるのです」、「屈んだ像は十分に配慮された私の意識的な表現であり、それは必ず人々にわかってもらえるものと確信しています」と語っている。1969年秋に発表された作品は変更することなく、1970年8月29日除幕された。その後、一部の過激な集団が1972年10月23日作品を爆破した。この暴力行為は、作品の是非を論議していた両者から非難された。(以下略)」(本郷新記念札幌彫刻美術館ホームページ作品解説 2005年8月1日・札幌彫刻美術館 学芸員 井上みどり)

「北海道」「100年」には憎しみや怒りが鬱積する。破壊の感情は深い。生き続ける「旧土人保護法」で保護されるべき対象とされ生活の大地を追われ言葉や文化を奪われたアイヌ民族にとって祝える100年記念ではない。アイヌに行った同化政策を朝鮮併合で実施した、と言われることがある。侵略の時を抱えて生きてきたアイヌ民族と侵略の側に立ってきた「日本国民たる北海道民」の100年記念に納得などできない。本郷はアイヌを蔑視していない。作品には『アイヌの青年』があるし、お気に入りのアツシを着て鑿を振るうことも多かった。その時点で、本郷よりはむしろ北大「建設期成会」の限界、アイヌに対する理解と教養の限界を指し示していた。『北大わだつみ像』の建設に関わる3つめの理由、北海道開拓100年記念こそは、『風雪の群像』への破壊を呼び、ひいては『わだつみ像』の放浪を呼び寄せる遠因になったのではないか。

まとめにかえて 継承へ向けて

本論は『わだつみの声』像の来歴と像が全国に広がる姿をまとめた。作者本郷新の苦悩と願いが込められた像はこれからも風雪に耐えて立ち続け人々に問いかける。「きけ わだつみのこえ」と。私はその像と人々をつなげる学校教育と社会教育実践を続けている。

所属

北海道札幌市立石山南小学校教諭、北海道教育大学札幌校非常勤講師（生活科教育学）、学び探偵団アニメシオンクラブ世話人、歴史教育者協議会。宮の森芸術フェスタしん・森・新事務局